
二択

dig

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二択

【Nコード】

N8044H

【作者名】

dig

【あらすじ】

薄暗い部屋に閉じ込められた…あたしは、二択を迫られた。

ファイル1 閉じ込められた孤独

あたしは、しがないただの専業主婦。

夫もしがないサラリーマン。

何の取り柄もない。

ただ毎日、掃除をして、夕食の用意をしていた。

そんなあたしがなぜ…このような場所に閉じ込められ、監禁されているのだろうか？

もう30歳を過ぎたあたしを、誘拐する意味があるのだろうか？

確かに、若いときはそれなりにもてたけど…。

あたしの前に座る眼鏡をかけた男は、何の飾りもない机に、二枚のカードを並べると、そつと差し出した。

「木野律子さんですね」

男は、あたしに話し掛けた。

鋭い視線を向ける男は、あたしを性的対象として見ているようには思えない。

だけど、その刺すような視線は、あたしの瞳の奥の何かを探っているように感じた。

（何を…？）

あたしは別に、縛られているわけではなかった。

ただ四角い正方形の部屋の真ん中に置かれた机に、男と対面する形で座らされていた。

そして、あたしの真後ろには、ドアがあった。

（すぐに逃げれるわ）

他人事のように思っていたが…なぜか体がだるくって、立ち上がる気が起きなかった。

（薬でも、飲まされたのかしら？）

そういえば、今朝だされたごはんには、味がなかった。

あたしは思わず、視線を外し、膝の上できつく握られた両手に目を落とした。

「木野さん？」

男は、下を向いているあたしの顔を覗き込んだ。

「は、はい…」

あたしは声を震わして、顔を上げた。

「どうかなさいました？」

男の事務的な口調が、逆に怖くて、あたしの体はガタガタと震え出した。

その震えは、机を揺らした。

「あ、あたしを、い、家に帰してください！い、家に帰らないといけないんです！お、夫の食事の支度もありますし…」

男はあたしの言葉を遮るように、

「今から行くゲームに、答えて頂ければ、帰れますよ」

「嘘よ！も、もし間違ったら…あ、あたしを…」

震えが、怯えに変わるあたしの様子に、男は軽いため息をつくと、

「ご心配なく…。このゲームに間違いはございません」

緊張を解こうとしてくれているのか…あたしに少し微笑みかけた。

「音楽でもかけましょう。木野さんが、好きだと言っていた曲でも」

男はちらりと、後ろに見た。

あたしが、閉じ込められている部屋に、どこからか音楽が流れてきた。

F l y M e T o T h e M o o n .

あたしを月に連れてって。

音楽が流れる中、ゲームは始まった。

間違いがないというゲームのルールは、簡単だった。

机の上にある月のカードと、太陽のカード。

それを今から、男があたしに問いかける質問に対して、月と思うか、太陽と思うかで、どちらかのカードをあたしが手に取るだけだった。

男は深呼吸すると、あたしに告げた。

「このゲームを始める前に、私の名前を言っておきましょう。このゲームの正統性を示すために…」

「あっ！」

あたしは素っ頓狂な声を上げて、手を叩いた。

「長谷川さん…長谷川さんでしたね」

名前を思い出したことが、嬉しそうなあたしの反応に、

長谷川正流は、自分の膝の上に置いてあったノートに、ペンを走らせた。

「あらあ？」

あたしは、首を傾げて、

「…どうして知ってるのかしら？」

改めて、あたしは目の前に座る長谷川を見た。

あたしを閉じ込めているのは…知り合い？

そう思うと、あたしの全身に、悪寒が走った。

「木野さん」

長谷川はじつと、あたしを見つめ、

「初めても…よろしいですかね？」

その視線の鋭さに、あたしはただ頷いた。

長谷川は、あたしの目を見つめたまま…おもむろに最初の質問を口

にした。

「家庭生活は、月ですか？太陽ですか？」

「はあ？」

あたしは質問の意味が、わからなかった。

「ど、どういことですか？」

あたしの困惑にも、長谷川は動じずに、トーンを変えることなく冷静に言った。

「直感で構いません」

しかし、狼狽えるだけで、こたえることのできないあたしに、長谷川は自らの緊張を一回解くかのように、また笑いかけた。

「でしたら、違う質問を先にしましょう。太陽と月…どちらが好きですか？」

その質問は、あたしにとって簡単だった。

あたしは、月のカードを手を取った。

「どうしてですか？」

取ったカードの絵柄を見ずに、あたしの瞳の奥を覗こうとしているように感じる長谷川の質問に、あたしはなぜか素直に答えた。

「昔は、太陽が好きだったんですけど…どうしてでしょうか？今のあたしには、眩し過ぎて、月の明かりの方が柔らかい感じがします」

「そうですか…」

長谷川はまたノートに、ペンを走らせながら、

「先ほどの質問を繰り返します。家庭とは、太陽ですか？それとも、月ですか？」

「それは勿論…」

あたしは自然に笑顔を浮かべながら、太陽のカードに手を伸ばした。

しかし、机の上にあるカードを手にとった瞬間、カードはあたしの手から、零れ落ちた。

「あらあ…すいません。どうしたのかしら？」

何度も取ろうとするけど、あたしは取れなかった。

「もうわかりましたので、取らなくて結構です」

長谷川は、冷たく言い放つと、次の質問をした。

「太陽という理由は、どうしてですか？」

あたしはなぜか…カードを取ることに拘っている指先を見つめた。

じっと見つめていると、自然に指は諦め…机の上から下に落ちた。
太陽の絵が書いてあるカードを、見つめる視線だけが、諦めなかつた。

自然と口が動いた。

「太陽って、掴めないじゃないですか。真上にあって」

切なくカードを見つめ続けるあたしに、

「それは、月も同じではありませんか？」

「あっ！そうですね…だけど」

長谷川の言葉に、あたしはフツと笑い、

「太陽は熱過ぎます」

「そうですか…」

長谷川は、走らせていたペンを止めた。

音楽が止まった。

ただとすぐに、再び同じ曲が始まった。

長谷川はしばらく、あたしを見つめた後、質問を続けた。

「明るいのは、太陽ですか？月ですか？」

他愛のない当たり前の答えしかない質問が、しばらく続いた。

そんな時は、長谷川はノートに書き込むことをしなかった。

そんな他愛もない質問に、数問答えた後、あたしは自分でもわからないが、キレた。

机を叩き、立ち上がり、

「いつまで、こんな質問を続けるんですか！あたしを家に帰して下さい！」

再び興奮状態になるあたしを、長谷川はゆっくりと見上げて、

「あと…数問で終わります。それに、お答え頂ければ…あなたは帰ることができます」

「本当ですね！」

あたしは長谷川を睨んだ後、静かに腰をおろした。

長谷川はノートから手を離すと、机の上に両肘をつき、

「あなたにとって」

一度言葉を切り、

「男とは…太陽ですか？月ですか？」

あたしは、目を丸くし、

「男ですか！」

声を荒げた。

「そうです」

長谷川の口調は、変わらない。

あたしは、その質問になぜか…自分でもわからないけど、ヒステリックになった。

「男！男！男なんて」

男という言葉の口にするだけで、頭に血が昇っていく。

両手で、髪の毛をかきむしり、

「男なんてえ！」

叫びまくった。

「木野さん。落ち着いて、カードを選んで下さい」

「いやああ！」

あたしは太陽のカードを掴むと、床に捨て、踏みつけた。

何度も何度も踏み付けるあたしに、長谷川は冷静にきいた。

「太陽なのですか？」

「太陽のわけがないわ！」

あたしは、カードを思い切り踏み付けながら、

「太陽のわけがないわ！」

「でしたら…月なのですか？」

長谷川は、机から離れない。

「月…月？」

あたしは動きを止め、机の上に残った月のカードに目を向けた。

「月…」

なぜか、あたしの瞳から、涙が流れた。

「月のはずがありません…」

「でしたら、女はどうですか？」

長谷川は質問を変えた。

「女？」

あたしは、長谷川に顔を向けた。

そして、ゆっくりと歩きだすと、長谷川の隣に立ち、顔を近付けた。

「それは、あたしもですか？」

長谷川は答えず、あたしに顔を向けた。至近距離で、目が合う。

「あたしは、女ですよ。」

何もこたえない長谷川から、あたしは顔を背けるように離れると、また髪をかきむしり、

「あれも…女？」

「あなたは、女ですよ。そして…」

やっと長谷川が、口を開いたのに、遮るようにあたしはカードを拾いながら、

「女は、落ちた太陽よ」

口元が緩んだ。

「月ではないと…」

嘲るように笑みを浮かべるあたしに、長谷川はまたきいた。

「月？」

「月は…満月や、三日月へと変化しますが、あなたは どう思いますか？」

「変化したら、いけないのよ！月のように、欠けたり満ちたり…満月が短いなんて、幸せが短いなんて…！」

癪癪を起こすと、あたしはカードを捨てた。

「駄目よ！」

その場で崩れ落ち、泣き出すあたしを、長谷川はただじつと観察していた。

声を出して泣いた後…あたしは平然と、席に戻った。

涙を拭うことなく、泣いたことに気付いていないように、背筋を伸ばして、長谷川に顔を向けた。

「あたしは、いつ家に帰れるんですか？どうしたら、ここから出して頂けますか？」

長谷川も無表情で、あたしを見た後、少し深呼吸をすると、席を立

ち…床に落ちている太陽のカードを拾った。

そして、再び机の上にある月のカードの横に置いた。

「簡単なゲームを行います。私の質問に、太陽と思うか、月と思うか…心のままにカードをお取り下さい」

「わかりました」

あたしは、もう一度姿勢を正した。

「これが、最後になります」

長谷川はじつと、あたしを見つめ、

「木野さんにとって、お子さんは…太陽ですか？月ですか？」

あたしは、即答した。

「太陽でした」

「でした？」

「はい」

あたしは頷き、月のカードを手に取った。

「夜泣きはひどいし、疲れましたけど……あたしには、太陽でした」

…」

あたしの手から、月のカードが滑り落ちた。

「先生…」

律子は、席を立った。

そして、長谷川を見下ろし、

「先生。少し疲れましたわ。外に出てもいいかしら？」

笑顔で聞いた。

長谷川も立ち上がると、ノートを机の上に置き、律子に笑顔を向け、

「いいですよ。少し…外の新鮮な空気を吸われた方がいいですから」

長谷川は、律子の横を通り過ぎると、後ろのドアを開けに行った。

「……」

律子は机から離れ、ドアの方に体を向けると、ゆつくりと歩きだす。

「失礼します」

そして、頭を下げた後、長谷川が開けているドアから廊下に出た。手を前で揃え、背筋を真っ直ぐ伸ばすと、廊下の先だけを見つめ、歩いていく。

「長谷川先生」

ドアの外に控えていた男が、律子の背中を見送りながら、長谷川にきいた。

「彼女はやはり…」

「ええ…間違いありません」

長谷川は頷いた。

机の上に置いたノートには、ある新聞の記事が挟んであった。

育児ノイローゼにかかっていた34歳の主婦。夫の浮気に気付き、

夫と浮気相手である女性を殺害。

浮気相手の女性は、加害者の親友であった。

殺害時、一歳の赤ん坊も死亡。

但し、赤ん坊は…加害者が現場に連れてきた為、殺害時の混乱により、あやまって亡くなったものと思われる。

赤ん坊は事故死とされた。

「だけど…」

長谷川は、廊下をゆっくりと歩いていく律子の後ろ姿を見つめ、

「彼女は、もう戻ってくることはありません」

刑事も、律子の背中を見つめ、

「太陽を自らの原因で亡くしてしまった母親は…もとは戻らないでしょう」

「それでは…」

「彼女は、永遠に…彷徨いますよ。自らの心の裏側を」

長谷川は初めて、悲しそうな表情を浮かべた。

「先生いいんですか？外に出して！」

廊下にいた長谷川の助手が、叫んだ。

「いいですよ。どうせこの施設からは、出ませんから……」

長谷川は、精神科の医師だった。

「彼女はここから、出ません。閉じ込められていると思い込むことで、何とか生きているのです。帰る場所がなくなっただのに……帰らなければならぬと思うことで……」

「彼女は、覚えていないのですか？」

刑事の問いに、

長谷川は薄ら笑い、

「人はあまりにも、ショックなことがあると……忘れるといいますが……あそこまでいきますと……」

廊下の向こうで、律子はドアの前で止まった。

「覚えていない……忘れたというレベルではないでしょうね。完全に心を閉ざそうとしていながら、罪の意識がそのことを許さない」

その事実である……地獄から助けだし、救うことはできないだろう。

子供を失った母親。どんな薬で治るというのか。

そんな時、精神科医はただ…今ある結果を事例と比較、確認し、報告するだけだ。

薬で誤魔化すことはできる。

しかし、それも地獄であると、長谷川は思っていた。だから、彼は薬をできるかぎり使わない。薬をする訳にはいかなかった。

長谷川は、無意識に律子の背中に頭を下げた。

律子は自ら手を伸ばすと、廊下の先にある鉄製の扉のノブに手をかけ、外に出た。

そして、外の眩しさに目を細めた。

「先生？日傘はございませんか？日射しが眩し過ぎて、お肌に悪いですわ。紫外線がきつくって」

律子の言葉に、長谷川は部屋の前で、もう一度頭を下げた。

「生憎…ここには、日傘はございません」

「仕方ありませんわね」

律子は、外に出た。

「少しくらいの散歩でしたら…陽に焼けないでしょ」

目を細めながら、光の下に出た律子はすぐに振り返り、まだ部屋の
前で見守っている長谷川に、頭を下げた。

長谷川も笑顔で、頭を下げた。

そんな長谷川に微笑みかけると、そのまま…ゆっくりと前を向き、
歩きだす律子の真上に、

月が輝いていた。

End…。

ファイル2 君だけを

「どうですか？少しは…落ち着きましたか？」

鉄のドアを開き、机の向かうで俯く男に、長谷川正流は、笑いかけた。

「…」

無言の男を見つめながら、長谷川は前に座った。

そして、両肘をつき、身を乗り出すと、改めて男にきいた。

「落ち着きましたか？佐山さん」

「あっ」

小さな声を上げ…佐山は名前を呼ばれたことに気づくと、やっと顔を上げた。

「先生…」

赤く腫れ上がった目が、佐山の心情を表していた。

「落ち着きましたか？」

「ええ…」

佐山はまた俯いた。両膝に置いた拳を見つめながら、呟くように言

葉を続けた。

「落ち着いたといえますか……すべてを失ったのに、まだ……生きて
いる自分に、驚いてます。だけど……」

「だけど？」

長谷川は、かけた眼鏡のレンズの向こうにいる……佐山のすべてを焼き付けようと、集中していた。

そんな長谷川の鋭さに気づかずに、佐山は震えだした。

しばらく、言葉がでない。

数分後、佐山の拳に涙が落ちると同時に、言葉が出た。

「だけど……私には、何もあります。何にも……」

そう言つて、ただ涙だけを流す佐山を、長谷川はただ見つめていた。

何もきかずに。

どれだけの時が過ぎたか……

佐山は、語り出した。

それは、供述ではなく、自分のなくしたものを思い出すように……

彼は、語り出した。

それは、彼の思い。

私と妻との出会いは… もう何年も、昔です。

初恋に近いでしょう。

一目惚れってあるんですね。

中学生の時、入学式で出会いました。

人混みの向こうでも、輝いている彼女に。

あの時、こう思いましたよ。

灯台ってあるじゃないですか。

何があっても、私はそこにたどり着きたいと思いました。

だけど、彼女は…秀才でした。

頭がいいですよ。

その時、思ったのは、彼女とできるだけ長くいたいと。

中学だけでなく、高校も一緒にいたいと。

あの頃は、付き合いたいとかは思わなかったです。

私はそんなに、顔もよくないし…。

だから、遠くても、同じ学校にだけでもいたかった。

お、おかしいでしょ。

彼女がどこの高校に行くのか…わからないのに。

馬鹿だった僕は、その日から勉強をしました。

彼女と離れたくないから…。

話すことは、ほとんどなかった。

一年、二年は、同じクラスになることはなかった。

けど、

三年の時、

同じクラスになれたんですよ。

その頃の私は…勉強だけをやっていたからでしょうか…。

学年でも、十位以内に入っていました。

そうになると、周りの友達も変わってくる。

その中に、飯田という…顔もよくって、頭をいいやつがいたんですよ。

一年の時は、私を鼻にもかけなかった飯田が、三年になると、よく私に話かけるようになってきた。

飯田はほとんど学校に来ないで、家で家庭教師達に、勉強を習っていました。

あまり飯田を、私は好きではなかったのですが…何かの弾みで、言ってしまったのですよ。

妻が好きだと…。

飯田はそれからよく、妻のことを、私に話しました。

実は、二人は…周りに内緒で付き合っていると。

きいてもいないのに、デートのことや…初キスのことも…。

そして…。

佐山は、唇を噛み締めた。

長谷川は、佐山の話をメモることなく、ただ聞いていた。

「つ、妻との初めてのことを…」

だけど、おかしいんですよ。

それでも、私の妻への気持ちは、揺るぎませんでした。

まだ…好きなんですよ。

私は逆に、ショックを受けることなく、ただ冷静になり、勉強に没頭していきました。

いつのまにか…私は、学年一位になってました。

その頃、どうしてか…。

私が、妻のことが好きだと…クラスで広まりました。

私は、飯田と妻に申し訳ないと思いつつも、それを否定しませんでした。

一度、妻と目が合ったことがあります。

誰もいない廊下で2人…。

だから、私はただ…ただ頭を下げ、笑顔を向けました。

それだけです。

私はすぐに、妻の横を走り抜けました。

それから…しばらくして、進路を決めなければいけなくなりました。
勿論、妻の進学先は知りませんでした。

飯田からは、きけませんでした。

いや、きけるわけがないんです。

そんな中…私とは逆に、飯田の成績は下がっていったのです。

妻と付き合って…しばらく経ってから。

一時期は、妻のことを毎日電話をかけて、日曜日まで報告してきていた…飯田から、ぴたりと報告がなくなりました。

確か…冬休みに入り、正月を過ぎた頃でした。

学校が始まる寸前、私は、衝撃の事実を知りました。

飯田が自殺したのです。

彼は成績が落ち、目指していた志望校に行くことは、絶望的になっていたのです。

私は勿論、彼の葬式に行きました。

大勢の悲しむ人々の中で、私の目は無意識に、彼女を探していました。

妻の姿を。

しかし、そこで彼女を見つけることはありませんでした。

それから、数ヶ月後、私は地域でも有数の進学校に、入学しました。

そこで、私は妻と再会したのです。

それから・・・三年になり、大学に進学する時、彼女から言われま
した。

同じ大学に行こうと・・・。

今考えると、おかしい2人でした。

同じ大学に行き、四年間、ただ彼女と過ごし・・・就職という
同じにはできない選択が来た時、私達は付き合うことになったので
す。

どちらから、告白したのかは、覚えていません。

多分：私に記憶がないから、彼女かもしれません。

そして、結婚。

私は、彼女と離れたくなかった。

だけど、深く…近づくことはできなかったのです。

あんなにも幸せな日々…。

だけど、私の脳裏には、あの頃の飯田との日々が、飯田としたであ
ろう彼女の行為が、よみがえるのです。

初めて、妻とキスをした時、

初めて抱こうとした時、

私は、

私は、

私は、

私は、

妻を抱けなかった。

妻を抱けなかった。

「抱けなかったのです!」

嗚咽するように、泣き叫ぶ佐山。

「私は男として…機能しなかった」

長谷川は一言も、発することはない。

その時の…妻の顔を忘れません。

彼女は微笑み、ただ…無能な私を、抱きしめてくれました。

それから、数年経ちますが、私はずっと妻を抱けなかった。

そんな私に、文句を言わずに、ただ優しく笑顔を微笑む妻が、愛しかった。

誰よりも、愛しかった。

だけど、愛しく思う程に、飯田のことが浮かび、胸が苦しくなった。

狂いそうになった。

なぜ！

私は、彼女の初めてではないのだ！

私は…狂いそうだった。

いや、狂ったのだ。

「私は…」

佐山は、自分の手のひらを見つめ、

「あの日…」

小刻みに震え出した。

「寝ている妻の背中に…包丁を突き刺した」

佐山は頭を抱え、

「私が自殺することを考えた！だけど、生きて…妻が、また誰かのものになるのが、いやだった！だから、刺した後、死ぬつもりだった！だ、だけど！」

目を見開き、

「妻を刺した瞬間…私は気づいたのです！なんてことをしたのかと！」

佐山は次の瞬間、我に返り、救急車を呼んだのだ。

「私は、妻を殺してしまった」

佐山は再び…包丁を持っていた手を見つめ、

「愛しているのに」

後悔に苛まれる佐山に向かって、やっと長谷川は口を開いた。

「佐山さん…」

病院に運ばれた妻の詩織は、すぐに意識を取り戻した。

包丁は、急所を外れていた。

ベッドに横たわる詩織は、事情をききに來た警察に、驚くべきことを告げた。

自分で刺したと…。

警察に連行された夫は、錯乱状態であり、話を聞ける状態ではなかった。

自分で刺したと主張する詩織に、長谷川は警察から呼ばれ、会った。
とになった。

夫を庇っているのか。

それとも、あまりのショックで、おかしくなっているのか。

長谷川は冷静に判断する為に、呼ばれたのだ。

病室に入り、詩織の話とした長谷川は、真実を知った。

「わたしは、夫を愛しております。

もう何年も前から、口下手で照れ屋の為、直接、口には出してくれ
ませんでした。が、わたしをとて愛してくれているのが、わかって
おりました。

何よりも、大切にしてくれていることを。

だけど、わたしを、愛してくれることはできませんでした。

わたしを抱くことは、できなかったのです。

そんな女を… あの人、それでも大切にしてくれました。

いつも笑顔で、優しく微笑んでくれました。

そんなあの人に、わたしは、微笑み返すことしかできませんでした。能面のように、笑顔を張り付けて、わたしは…夫のそばにいたのです。

この居場所だけは、失いたくなかったからです。

わたしが自分でつけた…この傷よりも、あの人が負った傷の方がどんなに痛んでいることでしょう。

あの人に、罪はありません。

あの人に…罪なんてあるはずがないのです」

「私は…妻を傷つけることを選んでしまった」

佐山は、長谷川の言葉に気づかなかった。

「包丁を持った時…私は、どうして、自分を刺すことを選ばなかったのか！どうしてだあ！」

絶叫する佐山の腕を、長谷川は身乗りだし、掴んだ。

「それを、選んだなら！あなたは、ただの馬鹿だった！」

長谷川は佐山の腕を握り締め、

「あなたの奥さんは、生きている！そして、自分で刺したと主張している！」

「え」

「今、あなたがやるべきことは…選んでしまったことを悔やむより、これからを…2人で選ぶことだ！」

長谷川は佐山の手を取り、

「あなたは…ただ今の後悔を、未来の糧にしなければいけないんだ！」

長谷川の計らいで、病室に向かった佐山は、ベッドに横たわり、泣く詩織に駆け寄り、すがりついた。

これ程、嬉しいことはない。

佐山は、溢れる気持ちを、ただ…吐き出した。

今回の事件は、詩織が自分で刺したと主張を変えなかったが、明らかに、自分で刺すのは無理があった。

だが、刺されたことを認めない被害者に対して、これ以上は深くは追求できない。

夫は認め、反省している。

殺人罪にすることはなかった。

「フウ…」

人生の選択…。

佐山は、最悪の結果を選んでしまったが・・・それが、夫婦の絆を強めることになった。

それともう一つ。

長谷川が、詩織に確認したことで、佐山に告げなかったことがあった。

中学時代。

詩織は、飯田と付き合っていなかった。

それどころか、飯田のことを覚えてなかったのだ。

多分、飯田は…成績が上がった佐山を蹴落とそうとしたのだろう。

今更、佐山に言っても仕方がない。

今の彼には、必要ない情報である。

彼は、克服したのだから。

1人寂しく、自宅に帰った長谷川は、ため息をついた。

「結婚…か」

残念ながら、彼には相手がいない。

終わり

ファイル3 メールの残り香

人は愛ゆえに、優しくも残酷にもなれる。

女を狂わすのは、愛だ。

よく女同士に友情はないという。

しかし、それは…女が愛情に深いからではないのだろうか。

愛する人。

愛する子供。

たった1人しかいない自分が、与える相手のなんて多いことが…。

ペットも入るかもしれない。

そんな女が、同じ女に同じように接することができるのだろうか。

仲が良かった2人の友達。

斎藤奈都子と鳥井綾。

そして、あたし…鹿島裕子は、学生時代からいつも一緒に、仲が良かった。

それは、OLになっても変わらなかった。

かけがえのない仲間…親友。

たまに、酔っぱらって、面とは言えないことを口にし合うこともあった。

そんな三人のうち…1人を失うことになるなんて…。

綾と奈都子は、同じ人を好きになった。

最初は、綾が先で…でも、付き合ったのは、奈都子だった。

「おめでとう」

綾の祝福の言葉に、奈都子は嬉しそうに、ありがとうとお礼を述べた。

学生の頃からの仲である。

うわべだけで言ってもわかる。だからこそ、綾の言葉は真意だと、あたしは思った。

けど、

2人と別れ、家に着いたあたしの携帯に飛び込んできたのは、綾の本音。

『やっぱり…堪えない！あの顔！あたしが好きになって、何とか仲良くなれたと思ったら…横から、あいつが近づいて来て…いつのまにか…あたしから、彼を！』

綾の気持ちも理解できた。

だから、あたしは慰めのメールを打った。

狭いワンルームマンションのほとんどを占領するベッドに倒れ込むと、あたしはため息をついた。

しばらく奈都子と彼の幸せは、続いていたと思う。

奈都子もどこか後ろめたい気持ちがあったのか…三人でいるときは、彼氏の話はしなかった。

三人でいる時間も、減った訳ではなかった。

時折、あたしと奈都子が話している時に、ふっと横目で綾を見ると、レモンティーのグラスを持ち、虚ろな目で、あたし達以外を見つめていた。

「じゃあね」

変わったことといえば、別れる時、奈都子の方向が違つようになったことぐらいだ。

遠ざかっていく奈都子の背中を見つめながら、綾はぽつんと呟いた。

「向こうにいるんだ…」

それと、もう1つ変わったことは、綾の口数が減ったことだ。

その代わり、メールはよく来た。

『今、何してるの?』

そんな始まりのメールから、何度かやりあった後、最後はこう終わった。

『あの子らは…何してるんだろ』

そのメールにどう返していいのか、わからなかった。

だから、あたしは、

『さあ…』

とだけ返した。

ある日、仕事中…あたしは奈都子から呼び出しを受けた。

突然のことに驚いたけど、あたしは時間に余裕があったこともあり、休憩時間を使い、奈都子が待つカフェに向かった。

そこにいたのは、奈都子と…その彼氏だった。

真面目で、誠実そうな彼氏を見て、綾が好きになりそうと思ったけど、正直…奈都子には似合っていないように、第一印象は感じた。

そんな印象も、仲良さそうな2人の姿を見ると、次第に薄らいで来た。

休憩時間は短い為、すぐに職場に戻らうとするあたしに、彼氏は言った。

「これから、奈都子のいい友達でいてやって下さい」

「は、はい」

どうして、そんなことを言われるのかわからなかったが、あたしは頷いた。

会社に戻る途中、奈都子からメールが来た。

『彼氏と会ったこと…綾には、言わないでね』

あたしも、綾とのことはわかっていたので、今のことを言う気にはなれなかった。

『何か…変わったことはなかった？』

そんなメールが、綾から来ると、ドキッとしてしまう。

あたしは、何もなかったと打ち、他愛もない内容のメールを返した。

そんなやり取りを、数ヶ月行っていたが、ある日、メールが止まった。

そして、数日…三人で会うこともなかった。

あたしは気にはしていたが、毎日の仕事に追われ、綾や奈都子のことばかりを考えている暇がなかった。

「先輩！これ…どうするんですか？」

新しい後輩もできて、あたしは仕事に追われていた。

そして、また時が過ぎた。

いきなり、奈都子から電話があつた。

「裕子！あんた、綾の居場所を知らない！」

興奮し、怒っているような口調に驚きながら、知らないあたしが言うつと、

「わかった！」

と一度、電話が切れたけど、すぐにまたかかって来た。

「ごめん！ほんと、言いたくなかったんだけど……綾のやつ……あたしの彼氏というかもしれないんだ！」

「奈都子？」

「綾のやつ……あたしの彼氏を！」

怒りながら、泣いているのが、わかった。

「奈都子！何があつたの？」

あたしか聞いても、奈都子は混乱しているのか、答えず、

「2日前から、連絡取れないの！……綾の家かな？家よ！そ、そうよ！絶対！そうよ！」

奈都子はそう叫ぶと、あたしを無視して、電話を切った。

「それが、あなたと話した最後ですね」

あたしの前に、座る男は、あたしにそうきいてきた。

過ぎ去った事実を確認する為に。

奈都子の電話。

それが、あたしと三人の繋がりの最後だった。

後は、新聞とテレビのニュースで知った。

被害者 斎藤奈都子と町田透。

加害者…鳥井綾。

愛憎の縄れから、加害者は被害者宅で、2人を殺害。

錯乱状態になり、泣き叫ぶ奈都子を担当することになったのは、長谷川正流だった。

「あいつら！あいつら！」

愛憎の縄れ…浮気の末の殺人。

動機はわかりすぎていた。

しかし、不明なところがあった。

加害者は、明らかに殺しに行っている。最初から。

確かに、浮気現場を押さえた。それも、親友の家で…。

殺したく思っだろう。

だけど、最初から親友と恋人を殺しにいくだろうか。

加害者宅で、言い争った様子はない。

現場検証から、奈都子は家に上がり込むとすぐに、一目散に綾に近づき、綾の首を用意した出刃包丁で切り裂くと、返す手で、彼氏の股間に突き立てている。

口論がない。

奈都子は、殺しに行ってるのだ。

綾と彼氏はいわば…一回目の情事である。

もしかしたら、ただ部屋でお茶を飲んでいただけかもしれない。

これなのに…有無を言わずに、殺している。

「あいつは！あいつらは、あたしを馬鹿にして！騙して！いつも、いつも！」

泣き叫ぶ奈都子の供述を聞いていた担当者は、あることに気づいた。

「多すぎるんですよ。動機へ向かう理由が…。調べてみると、加害者の想像としか考えられないことがあります」

事件の事実関係をまとめた報告書に、目を通していた長谷川は顎に手を当て、少し考え込んだ。

「だけど…それを信じているんですよ！確信を持って」

「わかりました」

長谷川は頷くと、用意していたカードを上着の内ポケットにしまった。

（これは…いないな）

長谷川は、奈都子がいる部屋に入った。

奈都子のカウンセリングを終了した後、長谷川はあるものを、見せてほしいと担当の刑事に言った。

それは、携帯だ。

長谷川は、奈都子の着信履歴と、メール内容を確認した。

しかし、メールだけ、全部消去されていた。

それは、綾も彼氏も同じだった。

（事件の関係者が、全員…履歴を消している）

だけど、リダイヤルが、残っていた。

鹿島裕子。

「被害者達の共通の友人です。殺された鳥井も、犯人である斉藤とも、仲が良かったようです」

刑事の言葉に、長谷川はきいた。

「その方からも、話はきいたのですか？」

「昨日…」

「それで？」

「はい。彼女は、町田透を巡る2人の関係については、知っていました。何度か、2人から電話やメールで、相談を受けていたと」

「相談…？」

長谷川は、メールが消去されていることを思い出した。

（三人とも、消している？）

彼氏である町田も。

町田の携帯に、裕子が登録されていることは、確認できた。

「メールの内容を復元できますか？センターなどで」

長谷川の質問に、

「内容までは、無理ですが…履歴は、残っていると思いますが…」

その言葉に、長谷川は頷いた。

「それでも、構いません」

三人からのメールの送受信の履歴を確認した長谷川は、深く頷き、刑事に言った。

「鹿島裕子を、任意同行できませんか？重要参考人として」

しかし、裕子と三人のやり取りは犯行当日の3日前が、最後となっていた。

その代わり、綾と奈都子のやり取りは頻繁になっていた。

そして、裕子のアドレスに何度もメールを送る町田の履歴は、残っていた。

その事実が、長谷川を悩ませた。

町田と裕子の関係も疑ったけど、裕子は犯行当日の何日か前から、町田にメールを返した形跡はない。

悩みながら、長谷川は気になることを思い出した。

どこかに真実への糸口を見いだすかもしれない。

長谷川は、裕子がいる部屋と向かった。

鑑識から戻して貰った二つの証拠物を持って。

それは、携帯電話だった。

機種も、会社も違うが…二台の携帯につけたストラップだけが、色違いだが、デザインは同じだった。

貝殻でつくった手作りのストラップ。

部屋の中央…ディスクの前で、俯く裕子の前に座った長谷川は、すぐに説明しだした。

「突然ですが…あなたにゲームをして頂きます」

そして、長谷川は二台の携帯電話をディスクの上に置き、

「今から、私が出す質問に、どちらが当てはまるか…選んで頂きた

い」

裕子は、長谷川の顔を見ることなく、二台の携帯に目を落とした後、少し微笑んだ。

その表情の変化に、長谷川は眉を潜めた。

「先生…。先生でよろしいのでしょうか？」

裕子は顔を上げ、長谷川を見た。その潤んだ瞳に、長谷川は息を飲んだ。

（これは…）

それは、悲しみよりも、まるで恋する乙女が、一つの恋の終わりを受け入れた…。そんな瞳が流す涙。長谷川は、場違いな涙に、少し驚いてしまった。

「ええ…。先生で、構いませんが…」

少し戸惑いを出してしまった長谷川に、裕子は微笑みかけると、また二台の携帯に目をやり、

「あたしには…。その質問は、無意味です」

「無意味とは？」

一瞬で、表情を整えた長谷川は、裕子にきいた。

裕子は微笑みながら、

「先生が、これをあたしに見せるということは…知ってらっしゃるということですね。だけど今のあたしは、どちらも選びません」

裕子は、二台の携帯を見て、懐かしそうに目を細めた。

「鹿島さん？」

「このストラップは、あたしは作っただですよ。2人に…分け隔てなく、愛情を注いでいたから…」

長谷川は、裕子の今の言葉が、引っ掛かった。

「愛情…？」

長谷川の呟きに、裕子は顔を上げた。

「はい」

その力強い返事に、長谷川は裕子の真実を知った。

「あ、あなたは…」

裕子は、二台の携帯を長谷川の方に、指先で押し返した。

「あたしは、2人を愛してました。1人なんか、選べなかった。学生の頃から、ずっと…。だけど、ずっと続くなんて、思っ

せんでした」

「…」

長谷川は、ただ裕子の話を聞くことにした。

「それなのに…あの2人は…あんな…どうしようもない男に、引っ掛かって…取り合って」

その時、裕子の瞳に浮かんだ怒りの色を、長谷川は見逃がさなかった。

「あの男…。あたしにも、すりよってきたんですよ」

「だから…メールを送り、2人が争うように仕向けたと?」

長谷川の言葉に、意外そうな顔を向けた裕子は、しばらく長谷川を見つめた後…笑った。

「先生は…女について…女の深さについて、理解されていませんね」

「と、言いますと?」

長谷川は、もう表情を変えなかった。これくらいで、心は動じない。今からが、本番なのだ。

「あたしは…ただ、あの子達に、警告をしただけ…やめておいたらと、あんな男。だけど、あの子達は、もう虜…。あの子達が、燃え上がる程…あたしは、さめていったんです」

裕子は、もう長谷川を見ていない。

一度返した携帯電話を一台づつ、手にすると、

「メールを2人と交互にしていたのですけど…わかるんですよ。彼女達が、狂っていくのを…。友達なのに、相手を疑い…自分が愛情を注いでいる恋人をとられるんじゃないかと…。疑いが、憎しみを…そして、幻想を生んでいく」

冷静に話す裕子を、ただ長谷川は見つめた。

「そうだったら、あたしの言葉など聞きません。それに、2人が惚れた男は、最低でしたらから…」

裕子は口元を緩め、

「あの2人の想像通りの結果になった」

「なるほど…」

長谷川は、裕子に浮かんだ喜びの感情に気づいた。

「だけど…彼女達を、真剣に止めることはできたのでは？お二人は、友人であり…特別な感情をお持ちだったはずでは？」

「だから、先生は女をわかっておりませんわ」

裕子は手にしていた携帯電話を、落とすように、ディスクに置くと、

「友達なら…最後まで、付き合ったかもしれませんけど…あたしは、

愛情。さめた相手のことは、もういいんですよ。それに、あたしには…」

「鹿島さん…」

「あたしは、最初から、2人と結ばれるとは、思っていませんでした。長い付き合いですから…それは、わかっていました」

裕子はそう言うと、長谷川を見、また微笑んだ。

長谷川は、目を見開いた。

「先生…。あたし…好きな人が、できたんです。会社の後輩なんですけど、かわいいんですよ」

裕子の嬉しそうな顔に、

「その方は…」

きこうとした長谷川を、裕子は睨んだ。

「女よ」

裕子の強い言い方に、長谷川は口を閉じた。

「いけない？」

「いえ」

「あたしは、男を好きにならなくちゃいけない…理由がわからないわ」

「そう…ですね。人を好きになるのは、自由です」

長谷川は否定しなかった。

「ですが…お友達お二人が、ああいうことになった。それに関しては、あなたは、何も思わないのですか？」

長谷川の質問に、裕子は少し視線を逸らし、

「先生…。フラれた悲しみを癒す為には…いえ、心理学的に言いましようか？損失は、悲しみの中で癒えていく。あたしは、フラれたこと…2人を失ったことを悲しんだことで、もう…癒されているですよ。悲しみという行為で」

長谷川は、ある言葉を頭に思い浮かべていた。

子供を亡くした動物は、新しい子供を産み、育てることで、悲しみを乗り越えていく。

感情なき世界に、生きるもの。

（彼女は…愛情というものを語っているが、愛情ではない。彼女の愛情は…）

最初は、愛情だったかもしれない。

結ばれることのない世界の中で、彼女はこうなったのだ。

絶望を感じ、心の中で絶句した長谷川に、裕子は最後に、きいた。

「あたしは…罪に問われますか？」

その言葉に、長谷川はこたえた。

「いいえ…」

二台の携帯電話を残し、部屋から去った裕子。

長谷川は、大きく息を吐いた。

去る前に、長谷川は気になっていたことを、裕子にきいた。

「3人とも、メールが消されてましたけど…。それについてはなぜですか？」

長谷川の質問に、裕子は笑った。

「疑いだしたら…見るでしょ…携帯。だから、後ろめたかったんじゃないですか？あたしは、違いますよ。何でしたら、あたしの携帯をお貸ししますけど」

警察は、裕子の携帯に残ったメール内容を確認した。

すべて残っていた。

まるで、見られることを想定していたかのように。

警察が確認する間…裕子はただ微笑み続けた。ディスクに戻ることはなく、長谷川に向かって笑いかけていた。

携帯電話を返して貰うと、裕子は静かに頭を下げ、帰っていった。来た時よりも穏やかな表情で。

「先生…。やはり、彼女がそそのかしたのですか？」

代わりに部屋に入ってきた刑事の言葉に、長谷川は首を横に振った。

「彼女がやったことは…教唆犯にもあたりませんし…扇動罪にもあたらないでしょう」

しかし…。

長谷川は、カウンセリングを裕子に行いたいと思った。

だけど、その思いを、長谷川は口にしなかった。

彼女が望んでいない。

それに今の会話が、結局はカウンセリングのようになってしまった。

先生は、女を知らない。

その言葉だけが、長谷川に残った。

常識的にいったら、女が女を愛するのは、おかしいだろう。

（しかし…今は、自由だ）

そう思い、そうすることも。

だが、それを相手が、受け入れるかも…自由だ。

end。

ファイル4 指折り

「ここか…」

少し色褪せたマンションの前で、長谷川正流は立ち止まっていた。

普段は、刑事事件や猟奇的殺人事件等を精神鑑定をメインの仕事にしているのだが、今回は違う。

知り合いのご子息を診察しに来たのだ。

診察と言っても、まだ患者であるご子息を見ていないから何とも言えないが、父親から聞いてかぎりでは、カウンセリングは必要だとは感じた。

だから、自分よりも、きちんとした医師に診てもらった方がいいと進言したが、父親は長谷川に診てほしいと懇願してきた。

長谷川は精神科医といっても、犯罪者の嘘や内面を探り出すのが、役割であった。

二択という…方法を使って。

今回は、いつも使うカードを持ってきてはいなかった。

ご子息に関する情報が、少な過ぎたこともあったが、大体把握はできていた。

つまりだ。

「どうも、わざわざご足労申し訳ございません。先生」

玄関で、深々と頭を下げる母親に、長谷川も頭を下げた。

「さあ…どうぞ、御上がり下さい」

玄関から廊下を歩き、一番奥が、彼女の部屋だった。

「結花理」

母親がノックしたが、返事はない。

構わずに、母親がドアを開けた瞬間、長谷川は目を細めた。

部屋に溢れるブランドのバッグや、服達。

無造作に置いてある物は、彼女の心情を表していた。

そして、部屋の真ん中で膝を抱えてうずくまる女の小指は、分厚い包帯に包まれていた。

「はあ…」

深いため息をつく女からは、生気を感じなかった。

何を得ても、満たされない。

だから、とめどもなくなる。

なんとか満たされたいから、人は、求める。

例え…満たされなくても。

かつて、豊臣秀頼は徳川との戦いが始まる前、贅沢の限りを尽くした。

それは、恐怖や気が狂ったからではない。

どうせ、滅びるならばと、彼は贅沢をやめなかった。

その行為は、自己破滅と同じだった。

度を過ぎた贅沢は、滅びと繋がっている。

ただ集めただけの鞆は、必要さを感じとれなかった。

退廃的…デカダンス。

現在の社会は、カード破産や、借金を返せなくなった人は多い。

それは、自己破滅である。

自殺とは違うが、いきすぎた消費という行為は、自分を傷つけると

いう点では同じだった。

今さえ… あればいい。

この様な考えが、人から生きる意味を失わせる。

刹那的な快楽。

長谷川は、結花理の小指にも注目していた。

なぜならば、小指は彼女自身が折ったからだ。

確実に、彼女は未来を捨てていた。

そして、今さえ…。

リストカットなどと同じである。

しかし、無意識に深く切ることを抑え…自ら傷ついている信号となつているリストカットよりも、自らの指をへし折る行為は、さらなる痛みと日常生活さえ、困難にさせる。

つまり、彼女は自殺の一步手前にいるのだろつ。

（いや…）

長谷川は、眉を寄せた。

一歩手前とかではないのか。

いつでも、死を願う。

長谷川を見て、微笑む結花理。

その美しさに、長谷川は精神が壊れているようには見えなかった。

その代わり…長谷川が感じたのは、桜のようなイメージであった。

もうすぐ散りゆく…美しさとともにある儚さ。

彼女の瞳には、儚さしか見えなかった。

「あなたは…お医者さんですね？」

結花理はゆっくりと、言葉を発した。

「そうですね。一般の医者とは少し違うかもしれませんが」

長谷川の言葉に、結花理は口許を緩めると、視線を外した。

「あたしに…治療はいりません。だって…」

結花理の瞳に、陰が落ちる。

「悪いのは、あたしじゃないから」

長谷川は訝しげに、結花理を見た後、ドアを開けたまま心配げに様子を伺っていた母親に顔を向けると、頭を下げ、目で合図を送った。

母親は気にはなったが、頭を下げると、ドアを閉めた。

十二畳はある広い部屋に、長谷川と結花理しかいなかった。

長谷川はもう一度、部屋を見回した。

物に溢れた空間は、とても恵まれているように思えた。

しかし、溢れた過ぎたものにこそ…真実がある。

膝を抱えたままの結花理と視線を合わす為に、長谷川は腰を下ろした。

「今から…簡単な質問をします」

「質問？」

振り向いた結花理と、同じ高さで目が合う。

「ええ」

長谷川は頷くと、優しく見つめながら、言葉を続けた。

「単純な質問です。答えは、2つしかありません」

「2つ？」

「はい」

「…」

首を傾げ、少し考えた結花理は、ちよつといやらしい笑みを浮かべながら、長谷川にきいた。

「やりたくないと言ったらどうしますか？」

その質問に、長谷川は微笑み、

「それでもいいですよ。やる…やらない。それも、選べます」

困ることもなく、あっさりと質問に答えなくてもいいと口にした長谷川を、結花理はじつと少し睨むように見つめた。

長谷川は微笑んだ。

結花理は少し口調をあらげた。

「やらないと言ったら、どうするの？」

「簡単ですよ」

長谷川は腰を上げ、立ち上がった。

「帰るだけです」

そして、にこつと笑顔を見せた。

「な」

結花理は軽く、絶句した。

「あなたの選択は、質問に答えない…。ならば、私がここにいる理由はないですから」

頭を下げ、出ていこうとする長谷川に慌てて、結花理は声をかけた。

「あんた！頼まれてきたんでしょ！患者をほって帰る訳！」

結花理に背を向け、ドアノブに手を伸ばしていた長谷川は、心の中でフツと笑った。

（患者）

結花理は今…自分を患者と言った。

長谷川は振り返ることなく、結花理に言った。

「今回は、ボランティアですので…つまり、タダ働き」

にこつと笑うと、

「私に、無理にあなたを診る義務はありませんので…」

長谷川は慇懃無礼に、頭を下げた。

「お、お金の問題なの！みんな！みんな！お金が大切なの！」

突然取り乱し、体勢を変え、両手を床につけて叫ぶ結花理を見て、長谷川はノブから手を離すと、結花理に体を向けた。

「お金は、大切ですよ。だけど、それは手段であって…お金そのものではありません」

長谷川は結花理に近づくと、そつと肩を手を置き、座ることを促し、自分も腰を下ろしていく。

「答えて頂けますか？私の質問に」

ゆつくりと、腰を下ろした結花理は頷いた。

「…はい」

長谷川は微笑み、少し結花理の精神が落ち着くのを待ってから、口を開いた。

「わたしの質問に、どちらと思うかで答えて下さい。つまり、二択です」

結花理はコクリと頷いた。

長谷川も頷くと、最初の質問を口にした。

「ここにある大量の鞆や服は、あなたに必要ですか？」

「必要です」

長谷川は目だけで、鞆をチェックすると、

「同じデザインのものもありますね。あなたはまた、鞆を買うのですか？」

「はい…多分」

結花理は少し…視線を落とした。

その表情の変化に、長谷川は気付き、

「鞆が好きなのですか？」

「いいえ」

結花理は、首を横に振った。

長谷川は目を細め、

「それは、服もですか？」

「好きなもあります…」

「そうですか」

長谷川はここで一旦、質問を止めた。

深く理由を聞くこともできたが、それはやめた。そこに答えはあるが、それを無理矢理問いただしてはいけない。

長谷川の目に、包帯が巻かれた小指を見た。右も左も巻かれている。

（彼女は…自分の理由を知っている。だけど…やめれない）

どうして、やめないのかときいたら、彼女をさらに追い込むことになる。

（今、鞆や服のことを追及するのは早い）

長谷川は、話題を変えることにした。

話題を変えようにも、医者と名乗ってしまった為、迂闊にはできない。

無駄な買い物をするな。本当に必要なものだけを買いなさいと、口にした瞬間に、すべては終わる。

彼女はわかっているからだ。

指を折る行為は、自分への嫌悪感。

戒め…。

長谷川の目は、知らず知らずのうちに、結花理の小指にいつてしまった。

至近距離だったこともあり、長谷川の視線の先を結花理は気づいてしまった。

「ああ…これですか？」

結花理は笑顔になると、包帯が巻かれ、倍以上の太さになった小指を、長谷川の目の前に持ってきた。

「…」

いきなりのもので、長谷川は言葉がでなかった。

目を見開いた長谷川の表情に、結花理はクスツと笑うと、

「これは…ですね」

結花理は固定された両手の小指を、左右にスライドさせておどけてみせた。

そして、笑いながら、こう言った。

「小指って、小さくて脆そうじゃないですか。他の指が太いの…」

細くって、どうしてこんななのかな？だから、壊したくなるんです。その方がいっそ…楽にしてあげれそうで…」

長谷川ははっとした。

結花理の今の言葉で、理解できた。

（やはり…この子は）

長谷川は一瞬目を瞑ると、すぐに開けた。

その一瞬で、長谷川の表情も、雰囲気も変わった。

「結花理さん。あなたに質問します。今と過去…好きなのは、どちらですか？」

結花理は小指遊びを止め、じつと長谷川を見つめると、首を傾げた後、

「どちらも、好きじゃないです」

と答えた後、また少し考え込み、

「もしかしたら…産まれた直後は、好きだったかも！幸せだったかも…」

「あなたは…」

産まれたばかりを想像し、屈託のない笑顔を浮かべる結花理に、長谷川は顔に出さなかったが、心の中で涙を流していた。

「未来は…好きですか…」

無意識に出た言葉は、二択ではなかった。

「未来…」

その言葉を聞いた瞬間、結花理の瞳から輝きがなくなった。

「そんなもの…ありません」

長谷川から顔を逸らした結花理の目に、光が戻ったと思ったが、

それは少し滲んだ涙だと気付いた。

「結花理さん…」

仕事場では一度詰まったことのない長谷川の言葉が、続かない。

「先生」

少し戸惑ってしまった長谷川の一瞬の間に、結花理の瞳から涙は消え、ただじつと顔を凝視していた。

「先生…。先生は、どうなんですか？未来なんて、不確かなものが好きなんですか？好きなんですか？」

問い詰めるような結花理の口調に、長谷川は少し驚いたが、心の中で苦笑した後、逆に冷静さを取り戻した。

「好きですよ」

「どうして！」

即答した長谷川に、強い口調で結花理はきいた。

「どうして！未来なんてあるかもわからないし！辛いことが続くだけかもしれない！ずっとずっと辛いだけかもしれないのに！」

「結花理さん」

長谷川の言葉を見無視して、結花理は話続けた。

「だって！よくなる要素がないから！このまま続くの！あたしは、このまま苦しむの！だから、楽になるために」

「買い物で紛らしていたと」

「え……」

結花理の言葉が止まった。

長谷川は、部屋中の溢れたものを見回しながら、

「買い物に依存し、誤魔化してきた。だけど……もうお金がなくなり……買うこともできなくなつた……。だから、次は……」

結花理の小指に、視線を落とし、

「自らの小指をへし折った」

「！」

結花理は思わず、両手を背中後ろに隠した。

「次は、どうする気ですか？」

長谷川は、結花理の目を見つめた。

結花理の目が、大きく見開かれると、きりつと長谷川を睨んだ。

「死ぬしかないわ」

「いや……」

結花理の言葉を、長谷川は否定した。結花理から目を離すことなく、力強い口調で、肯定の言葉を吐いた。

「あなたは、死ねない。いや、死ぬ気はありません」

「あなたに、死ぬ気なんてない！」

確信したような長谷川の言葉に、結花理は絶句した後、発狂したように叫んだ。

「あたしは、小指を折ったんだ！その凄く痛かったのに！痛かった

のにい！」

両手を上げ、再び小指を床に強打しようとする結花理の手首を、長谷川は掴み、動きを止めた。

「離してよ！」

もがく結花理を、長谷川は一喝した。

「いい加減にしろ！」

掴み手に力を込め、長谷川は結花理を睨み付けた。

「あなたは！知って貰いたいだけだ！痛みを、自分の苦しさを！知ってもらいたいだけだ！こんなに苦しいんだってな！」

「ああ……」

結花理の動きが止まる。

「あなたを苦しさを……救おう！だから……教えてほしい。あなたの苦しさを」

長谷川の言葉に、先程は滲んだだけだった涙が、頬を伝った。

「あ、あたし……」

長谷川は手を離した。すると、結花理は両手を床に下ろすと、泣き出した。

感情を吐き出すように。

「あ、あたし…どう生きたらいいのか…わからないです。人との接し方も…だから、いつも一人で…」

長谷川は姿勢を正すと、結花理をじっと見つめた。

「やっぱりファッションとかにも、うとくって…あんまり綺麗な方でもないから…だから…少し変わろうと、ローンで、ブランドの鞆を買ったんです。それを持って…学校にいくと…みんなが、声をかけてくれて…」

結花理はただ…自分の小指を見つめていた。

「だけど…しばらくしたら、みんな飽きるから…また1人になって…。だから、新しいのを買って」

鞆だけでなく、ブランドの服を身につけるようになった結花理に、友達は言った。

『お金…あるんだね』

『うん』

と頷いた日から、結花理は友達になった子達の飲み代も払うようになった。

毎日のような飲み会にお金が続く訳がなく、

結花理はキャッシングを繰り返した。

友達のリクエストや期待にこたえる為に、結花理は服や鞄を変えまくった。

とうとう……買つことができなくなり、昔買った服を来て、学校に行つた時、

結花理は信じられない言葉をきいた。

少し遅れて、教室に入ろうとした結花理の耳に、

『やっぱさー！どんなブランド身に付けてもさ。結花理じゃあ、似合わくない？』

「そうそう！豚に真珠ってやつ」

「金なかったら、相手になんかしないってな」

[illegible]

教室に笑い声が、響き渡る前に、結花理はその場から走り出していた。

「どうして…あたしは、お金しか価値がない人間なんですか？あたしは…友達だと思っていたのに…」

泣き崩れる結花理から、長谷川は視線を逸らすと、言い放った。

「彼女達は、友達ではありませんよ。それに、あなたも彼女達を友達とは思っていませんよ」

「え？」

長谷川は、結花理に顔を向け、

「友達だと思っていたら、どうしてその場で言い返さなかったんだ！あなたも、彼女達を金で買っていたんだ！」

長谷川は、結花理に詰め寄り、

「あなたは、人の接し方がわからないと言った！それは、誰もがそうだ！だから、他人を知るために、気を使い、言葉を選び、真剣に向き合い、相手のことを考える！その繰り返し、人の接し方で…その中で、気の合う者が、友達や仲間になる！その関係の中で、お金は関係ない！物は、関係ない！」

「あ、あたしは…」

震えだす結花理の肩に、長谷川は手を置き、

「先程の理由を言いました。未来が好きな理由を…」

長谷川は、結花理に微笑みかけ、

「未来は、自分の好きにできるからです。今苦しくて、辛くて…」

明るい未来に、幸せにできます。それが、未来なのです。過去や、現実是不変ならないけど、未来は変えられるのです。自らの意志で」

「せ、先生……」

結花理の全身から、力が抜けていく。

長谷川は頷き、

「あなたは、1人と言ったけど……私をここに呼んだ両親がいる。誰よりも、あなたを心配している……」

「せ、先生……」

結花理は号泣した。

「指が……指が痛いよお！小指が痛いよお」

叫びながら、泣き崩れる結花理を、長谷川はぎゅっと抱き締めた。

数分泣いた後、結花理は呟くように、口を開いた。

「あ、あたし……借金いっぱいした……」

「ゆっくり返せばいい。今ある……いらぬ物を売ってもいいし……」

「先生…」

結花理は、すがり付いていた長谷川から離れると、顔を上げ、

「あたしに…質問して下さい」

「え？」

泣き顔を隠すことなく、まっすぐに長谷川を見つめ、

「あたしに、未来は好きか、嫌いかを」

結花理の瞳に、輝きが戻っていた。

長谷川は微笑むと、

「あなたは、未来が好きですか？嫌いですか？」

結花理にきいた。

結花理は唇を噛みしめ、折れてない指達を握りしめると、

「好きです！好きになってみせます！」

力強く言い放った。

長谷川は頷いた。

もう目の前には、膝を抱える者はいない。

「そう望む者の未来が、よくならないはずがないよ!」

長谷川は笑いかけた。

部屋を出ると、心配そうに立っていた母親がいた。事情を説明すると、長谷川は家を出た。

マンションを背にして歩く長谷川は、自分の携帯を取り出した。

そこには、新しい番号が登録されていた。

「友達1号か」

長谷川は苦笑した。

「まあ、こんなおっさんでよければ、いくらでも友達になるがね」

長谷川はにやけそうになる口を手で塞ぐで、咳払いをして、改めて歩き出した。

次の患者のもとへ。

end。

ファイル5 利用価値（前書き）

悲惨な事件の裏側にあるのは、愛である。

悲哀。

ファイル5 利用価値

しかし…ここまで、愛した者を簡単に壊せるものだろうか。

長谷川正流は、ため息とともに、今回の事件を記録したファイルを閉じた。

（犯罪者の心理は、わかる。しかし…俺には実感できないだろうな…。いや、愛することはわかる。だけど、殺さなければいけない程の愛情とは何なのか）
その根本が実感しない。

それは、あらゆる犯罪に携わる者ならば、悩むべきことであるはずが…事務的機械的に処理する内に、踏み込まなくなってしまった。

しかし、今回の事件は…少し違っていた。

（愛か…）

長谷川はもう一度、ファイルを開いた。

上原翔にとって、人を愛することとは、とても真摯なことだった。

別にもてない訳でもないが、運命の愛を信じていた。

たった1人の女性を愛し、添い遂げる。

しかし、現実はそのようなことは少ない。

愛さえも軽んじる時代と、多くの出会いの機会がある社会は、別れを容易にした。

純愛は憧れになり、いつしか…ドラマの中のものとなった。

それでも、上原はただ1人を愛そうとした。

彼女が、理想の相手でもなくてもだ。

きっかけは、彼女の方からだった。

彼女の父方の会社で働いていた上原は、いたって真面目であり、勤続年数も長くなっていた。

さらに、あまり文句を言わずに働く姿が…彼女には都合よかったのだろう。

彼女は父親が倒れ、代が変わる時に目障りな幹部を失脚させた。

その後釜に、上原を抜擢したのだ。

その前に、会社が私物化されていると、何カ月も上原に相談にしていた。

そして、任せる数週間前、上原に告白したのだ。

最初は何とも思っていなかった上原であるが、数ヶ月後…意識するようになった。

会社にはほとんど来ないで、交遊関係に時間をさいている彼女に…複数の男の影があることを、上原は理解していた。

しかし、それでも上原は…彼女の言葉を信じた。

一目惚れではない。

献身的に働くことで、深まったたった独りの愛情は、上原の心の底でたまっていた。

逃げ出そうと思ったが、今自分がいなくなれば、会社が回らないことを理解して、上原は我慢した。

それに、彼女の愛情が本当だとも信じずに。

彼女は狡猾であった。

彼女からの告白は、三回あった。

時期を開けての三回。

それは、上原の迷いの時期と重なり…その度に、彼女は愛を口にした。

それが、真実か…嘘かを勘繰らずに、彼は自分に面と向かって告白する彼女の勇気を信じることにした。

だけど…彼女の告白に、こたえる返事はしなかった。

仕事を頑張ることが、その答えになると思ったからだ。

そんな彼の思いは、少しずつ侵食されていく。

彼女は会社のブレーンに、元彼や…彼氏未満の男を器用していく。

それは、彼女なりの処世術だったのだろう。

それでも、上原は寡黙に働いた。

給料が下がり、休みがなくなっても…。

疲れがピークになった時、上原はついにある言葉を口にした。

それは告白ではなく…確認だった。

「好きです」

しかし、彼女はこの一言ですました。

「嫌」

だと…。

そこで、彼の愛情は終わったら、まだ良かったのだろう。

彼は、終わりを選ぶことができなかった。

彼は、彼女の言葉を耳にしても一年近く働いた。

たった独りの愛情を胸にして。

いや…責任感かもしれない。

そんな彼が、彼女を殺した動機は理解できた。

しかし、理解できないことが…長谷川にはあったのだ。

彼は、彼女の愛情にあまり期待はしていなかった。

だから、愛情がないとわかってても、我慢し理解できた。

ただ同じような男が、増えていくのが、許せなくなったのだろうか…。

「だから、殺意がわいたと？」

長谷川の質問に、上原は俯きながらも笑い、口を開いた。

「ただ…気付いただけです。もし…会社を辞めたら、何も残らない

自分がいると…。給料がいきなり下がったので…貯金はなくなりました。毎日、仕事しても…何の意味のない自分がいると…。だけでも！」

上原は、自分の両手を見た。

「会社も彼女も見捨てられない自分がいると！」

意を決して、会社を辞めることを…上原は彼女に告げた。

すべてを失ってもいいと思い、選択したのだ。

よく考えれば…上原がいなくなっても、代わりはいたのだ。

「そう言えば…彼女は言っていました。会社を継ぐ前に、もし…俺が辞めれば…元彼の部下…その時はそう言いませんでしたが…部下が入れば、会社にずっといなくてもならなくなる。何もできなくなる…」

元々…上原である必要はなかったのだ。

しかし、そんな上原に、彼女はキレ気味にこう言った。

「会社を見捨てるの？」

その言葉の後…上原は彼女を殺した。

自分で思っけていても、彼女の口から聞きたくなかったのだ。

「先生…」

机を挟んで座る上原は俯いた顔を上げると、長谷川の目を見つめ、
ゆつくりと話し出した。

「彼女を殺した瞬間…その痛みよりも、自分の心の方が痛んでると
思っただんですよ。数秒は…」

「数秒？」

長谷川は、眉を寄せた。

「はい」

上原は頷き、

「数秒後…何の感情もなくなっただのですよ。虚しさありません。
今まで、自分がやっけていたことも、多分…そんなものなのでしょう
ね」

視線を遠くに向け、

「ただ…楽にはなりましたよ。ここに来て、実感しました。やっと
解放されたと」

四角い灰色の部屋で安堵の息を吐いた。

長谷川はその姿に、目を見開いた。

そこには、人を殺した犯罪者ではなく…清々しい顔をした青年がいたからだ。

「先生」

上原は、長谷川に目をやると、微笑んだ。

「罪を認めます。どんなことでも、受け入れます。選んだ結果も満足しています」

彼の言い方はまるで…今までのことに比べたら、これからのことは大したことないと、言っているように聞こえた。

事件は、あっさりと解決した。

しかし、彼の笑顔と言葉は、長谷川の心に残った。

（人を殺して…救われたか）

長谷川は眼鏡を外し、目尻を押さえた。

彼女が、好きと答えたら…幸せになったのだろうか。

いや、幸せにはなれない。

（愛情は、独りでは…意味がない。互いに思いやらないといけない）

当たり前のことを、最後に思ってしまった長谷川は苦笑した。

（愛することが、恐くなるな。だけど…）

長谷川は、閉じたファイルを見つめ、

（恐れては…あるはずの真の愛に出会わない）

目を閉じた。

ロマンスだと、自分自身を嘲りながらも。

e n d .

ファイル6 死が笑う（前書き）

二択ファースト

なぜ、彼は二択を選んだのか？

ファイル6 死が笑う

「…ですから、犯罪は減ってきてるんですよ」

テレビ番組に、コメンテーターとして呼ばれた男は、隣にいるアナウンサーではなく、テレビの向こうに言う。

「…なのに、報道によって、人々はいらぬ不安にかられ…死刑がいたら、思い込まされている！」

ある学生は言う。

「社会的に、権限がないのに…死刑だけ適応するなんて…」

ある女は、言う。

「死刑とは、人類の最大の罪である」

と……。

法治国家の下、安全だというなら、警察もいらないのではないか。

「まったく、いつまでも、死刑という…野蛮な刑を発効する…この国の幼稚さ…は、いつになったら、なくなるんでしょうか」

放送後、テレビ局を出て歩く男は、コンビニの前にたむろし、地べたに座る若者に、険悪感を抱きながら、町を闊歩していた。

地下鉄で帰る為、階段を降りる男とは逆に、下から上がってくる男がいた。

紺のスーツを着た男は、階段を降りてくる男の顔を確認し、拍手した。

「素晴らしい！先生の答弁は、素晴らしい！」

拍手しながら、近づく紺のスーツの男は、ゆっくりと上がってくる。

「確かに、犯罪の数は減ってます。社会は、安全に近づいてますね」

スーツの男は、にこつと笑った。スーツの男に、殺意を感じない。

「あ、ありがとう」

少し気持ち悪いが、自分の話に賛同してくれているようだ。

男は喜んだ瞬間、

「え……」

腹部に激しい痛みを覚えた。

一気に男に近づいたスーツの男は、隠し持っていたナイフで、腹部を突き刺していた。

「減ってるんだから…1人ぐらいいいでしょ」

にこつと笑ったスーツの男は、耳元で囁いた。

「先生１人じゃ…上がりませんよ。ご心配なく」

「俺を助けて下さい。たまたま…そこに、こんなものがあつたから…危ないと思つたから…」

報道陣に囲まれ、会見を行っていた弁護士に、事件が伝えられた。

「彼は…殺そうとは、思っていなかった。これは、事故なのである」

鼻息も荒く話す弁護士は、

「死刑とは、更正する機会を奪うことになる」

そう何度も、繰り返していたが、突然飛び込んできた事件に、啞然となった。

報道陣が騒めく。

「只今、事件が入りました！坂城弁護士の娘さんの家に、少年が侵入し…生まれたばかりの赤ん坊が、刺された模様です」

その内容に、弁護士は席を立った。

「少年は、たまたま家が開いていたから、呼ばれているような気がして、玄関に入り…」

冷酷な報道は続く。

「キッチンに置いてあった包丁に、恐怖を覚え…昔指を切った為…それを排除するために、手に取り…赤ん坊が隣の部屋で、泣いていたから…包丁は危ないと、思い…どこにやろうとしたところ…あやまって、赤ん坊を刺した…と供述している模様」

身勝手な言葉は、続く。

「加害者となった少年は…坂城弁護士を指名…弁護してほしいと…」

少年は、最後にこう言った。

罪を認め、法に委ねると。

「だから…俺達が、何をしたというんだ」

カップルを囲む集団に、女を庇いながら、男は叫んだ。

「何もしてないよ…なあ」

「だから…何なのよ」

暴力は、理不尽に起こる。

詰め寄る集団に、男は怯み、後ろにいた女が携帯をかけようとした。

「何してんだよ」

集団の1人が女の手を取り、携帯を奪い取ろうとした時、囲んでいた集団に穴ができた。意識も、女に向いていた。

その隙を、男は見逃がさなかった。

隙間に体当たりして、男は逃げた。

「てめえ！」

見捨てた男の行動に気付き、何人かが男を追った。

「大和さん！」

女の悲痛な叫びも、大和には関係ない。

ただ恐怖だけが、大和を支配していた。

相手の数が多すぎる。

女を守るとかのレベルではない。

自分が危ないのだ。

ただ本能に任せて、大和は走った。

少し騒然としている廊下を、長谷川正流は歩いていた。

まあ…学校の廊下など、こんなものだろう。

別段、気にも止めなかったが、足は無意識に速まっていた。

「そんなに急いで、どこにいくんだい？秀才君」

前だけを見て、人をただの障害物とした思わないようにしていた長谷川は、すれ違った1人の障害物に、声をかけられた。

そのおどけた口調と、秀才という言葉が、長谷川にその障害物を、特定の人物へと認識を変えさせた。

足を止め、振り返ると、にやにやと口元を歪めた男が立っていた。

「中西…」

中西は笑みを残したまま、長谷川に言った。

「今日も、あの昼行灯のところにいくのかい？物好きだねえ」

「…」

中西の馬鹿にしたような口調にも、長谷川は怒ることはなかった。

この男は、こう言っやつである。

ただじつと、自分を見つめる長谷川に、中西は笑みを止めて、同じく見つめた。

ほんの数秒だが、見つめ合った後、中西は口を開いた。

「お前が、考えている…いや、印象付けている俺を理解しているよ。だけどな」

中西は肩をすくめ、

「自分でも、そんなやつと思っていたが…違うようだ」

そう言った後、また長谷川の目を探るように、見つめ、

「お前は…秀才だ。俺と同じくらいの。だがな…お前は、自分の裏側を知らない。ククク」

中西は声を出して、笑いだした。

「アハハハハ！」

ひとしきり、腹をかくけて笑った。廊下を行き交う学生たちが、訝しげに中西を見た。

「アハハハハ……」

次第に笑いは終息し、中西は睨むように、長谷川を見た。

また数秒…いや、もっと長い。

やがて、中西はゆっくりと長谷川に背を向けた。

「精々…頑張れや」

手を上げると、そのまま中西は振り返ることなく、歩き出した。

中西が学校を辞めたと、聞いたのは2日後のことだ。

彼が交際していた…いや、遊んでいた女性が、数日前に死亡していた。集団暴行により。

目撃者の証言により、犯人グループはすぐに特定され、捕まった。

そして、さらにわかった事実は、暴行された当時…被害者の女性は、男性といたことが確認されており、犯人グループの供述と、被害者の襲われるまでの足取りを調べたところ…いっしょにいたのが、中西大和であることが確認された。

中西は、女性を見捨て、逃げ出したのだ。

普通の彼なら、エリートである自分が生き残る為の手段として、単なる遊び相手がやられる間に逃げたことを正当化していただろう。

しかし、彼は良心の呵責に苛まれたのだ。

自分でも、予想しなかった罪の意識が、彼が望むエリートの道から、外れさせたのだ。

その日は、そんな事実を長谷川は、知ることなかった為、中西の

影ある後ろ姿を見送った。

少し、中西と話をしたくなったが、長谷川は先を急ぐことにした。

そして、さらに数日後、長谷川は、中西が自殺したことを知ることになる。

「失礼します」

少し古びたドアを開けると、まるで古本屋の倉庫のように積み上げた書類に囲まれたデスクの向こうで、眼鏡をかけた初老の男が、顔を上げた。

髪の毛はすべて、白くなっていたが、顔はまだ老けてはいなかった。

「また…君か」

少し呆れたように、長谷川に言うと、初老の男はまた顔を下に向けた。

「たまには、みんなと外に出たらどうだ？本やレポート…私のような世捨て人と話しても、仕方ないだろうが」

「いえ…そんなことは、ありません。私は、先生を尊敬しております。先生が、昔書かれた“人の尊厳”は素晴らしい本でした。感銘

を受けました」

少し興奮気味になり、

「人が人を裁いては、ならない。もし、裁くならば、その者の尊厳を尊重しなければならない。特に、死刑制度に関する意見は、とても率直で、鋭い！」

声をあげた長谷川を、ちらつと見た男は、鼻を鳴らした。

そして、また書類に目をやると、

「君は、まだ若いな。書類に書かれたことだけで、感動し、判断する」

その書類を掴み、書類を震わせた。

「こんなペラペラや、紙に書かれたもなど、何の重さもない」

そして、積み上げられた本を見て、顔をしかめた。

「こいつらも、同じだ。ペラペラが重なったに、すぎない」

「しかし、先生は毎日読まれ、研究されてしますよね」

「違う！単なる時間潰しだ。それと、自分をここに閉じ込めておく為のものだ」

「し、しかし」

長谷川が反論しようとしたが、男は遮った。

「君は優秀だが…人を知らない。いや、自分さえ知らないだろう」

男は、手に持っていた書類をくしゃくしゃに丸めた。

「人は、紙切れではないのだよ」

「…」

何も言えなくなった長谷川に、男はきいた。

「君が専行している教科だが…君は、すべて正しいと思うのかね？」

「え？」

「何と思われる…曖昧でありながら、確証してしまうという傾向がある。100%はあり得ない世界だ。だが、学者達は、さも正しそうに、決めつける！過去の事例などと照らし合わせるだけで！」

男は、長谷川を睨むように見つめると、

「人の本当の姿を知らぬ者に、あの者達のことを理解できるはずがないわ！」

突然、ディスクを叩いた。

「先生…」

長谷川は、少し様子の変わった男を見つめた。

男は少し荒げた息を整えると、席を立ち、ディスクの横で、本の土台と化している冷蔵庫を開けた。

そこから、ペットボトルのお茶を取り出すと、コップに注ぐと、長谷川に差し出した。

「君は、血液型を知ってるだろ？」

「はい」

男から、コップを受け取りながら、長谷川は頷いた。

「日本人は、血液型信仰のように、ただ糖の違いだけなのに、その者達の性格やすべてを決めつける！」

男はコップに口をつけると、

「だが、そんなもので…人は…血液型に惑わされて、B型はB型に、A型はA型に…暗示をかけられて、そのようになっていくのさ」

男は首を横に振り、

「その辺の血液型診断の本を読んでみる！誰にも、当てはまるようなことしか書いていない」

コップの中身を一気に飲み干すと、

「人間は、そんな単純な部分はある！それを、分析して、診断することはできるだろうが…」

その後、男は虚空に睨むような形で、その場で動かなくなった。

「先生……」

長谷川が声をかけると、はっとしたように、男は動きだした。

「と、とにかくだ。君は、外にでるべきだ。人と話すこと……それは、紙切れより、価値がある」

男は、長谷川の目を見て、

「ここは、天国のようだからな。妬みや嫉妬はあるが……それ以上はない」

と言ってから、男はフツと笑った。視線を外した。

「いや……それくらいで、いいのだろう。それ以上を経験する必要はない」

長谷川は、空になったコップに視線を落とす男に何も言えなくなった。

男の言葉は理解できた。

だが、そんなことを口にする男の真意がわからなかった。

心の奥底にあるもの。

長谷川はその存在に気付いていたが、それが何かを理解するだけの

経験がなかった。

「今日は人と会う約束をしていてな。この近くで、待ち合わせておる」

そう言われた為、男の部屋をそそくさと出た長谷川は、廊下を歩きながら、考え込んでいた。

男に感じた影…それが、何なのかわからなかった自分に、少し苛立っていた。

人のすべてが、わかるはずがない。

しかし、わかりたい。わかったと思いたい。

それは、エゴなのだろうが、長谷川が目指すことには、そのエゴが必要であった。

例え、奢りたかぶった行為であっても。

突然、携帯が鳴った。

授業中は、電源を切っているが、今日は忘れていた。

あまりかかってくることはないから、携帯を意識していなかった。

電話にでると、妹からだった。

どうやら、学校に来たらしい。

驚いた長谷川は、慌てて携帯を切ると、走りだした。

「兄貴！」

学生しか入れない茶店のご真ん中に、堂々と座る知佳子がいた。

誰が見ても、明るい印象を与える知佳子は、この学校では浮いていた。

「兄貴の学校ってさ！入り憎いじゃん！なんか、敷居が高いとかさ」

長谷川が座ると、もうテーブルの上は、ホットケーキや何かでいっぱい、コーヒーを置くスペースもない。

「よく食べるなあ」

長谷川は目を丸くすると、

「育ち盛りだから」

と、知佳子は胸を張った。

少し呆れながら、長谷川はきいた。

「で、何の用なんだ？」

知佳子は、パフェと格闘しながら、

「兄貴に会いたくなつたの！」

その台詞に、長谷川は飲もうといたコーヒーをこぼしかけた。

「うそ！」

知佳子はにっと笑い、

「それは、二番目！本当はね」

持っていたスプーンを置くと、周りを見回した。

「この学校を見たかったの」

「知佳子？」

「あたしには、無理だつて分かつてるけど．．．兄貴のようにかしこくないしさ。だけど．．．憧れてもいいじゃん」

そう言った時の知佳子の横顔を、長谷川は忘れることができなかった。

「兄貴！御馳走様！」

手持ちの金が底をつきたが、知佳子の笑顔を見ると仕方なく思えてしまう。

学校からでているバスも本数は、少ない。30分に一本だ。

最寄りの駅まで、歩いて15分。

バスが出たばかりでもあり、知佳子は歩いていくことにいた。

「送ろうか？」

長谷川の言葉に、知佳子は首を横に振った。

「まだ授業があるんだろ」

「そうだけど…」

「頑張れ！学生！」

知佳子は走り出した。

「じゃあね！兄貴」

手を振りながら、離れていく知佳子を、長谷川は見送った。

それが、知佳子を見る…最後になることも知らずに。

数時間後、長谷川は校内放送で、学生課に呼び出されることになった。

こんな時も、事務的に、職員は言った。

「ご両親からです」

受話器を渡された長谷川は、携帯の電源を消していたことに気づいた。

わざわざ学校にかけてくるなんて。

長谷川は、首を傾げながら、電話に出た。

「はい…」

その後、長谷川の心臓が止まった。息もできない。

受話器の向こうから、母親の声だけが響いていた。

「そんな…馬鹿な」

それだけが、口から出た。

今聞いた事実が、信じられなかった。

受話器を耳に当てたまま、凍り付いている長谷川の逆の耳に、警察と救急車のサイレンが聞こえていた。

自失呆然となっている長谷川の前に、初老の男が立ち尽くしていた。

「私のせいだ」

男は、わなわなと全身を震わせた。

「私が、守ったから」

男は頭を抱えながら、髪をかきむしり、そのままふらふらと漂うように、長谷川の前から、姿を消した。

「先生！」

初老の男の様子も、気になったが、今はそれどころではない。

長谷川は、病院へと急いだ。

そこで、長谷川は変わり果てた…妹と会うことになった。

白昼堂々と起こった残忍な事件は、1人の少女の命を奪った。

あっけなく。

何の恨みもあつたわけでない。

犯行を行ったのは…かつて、少年だった男。

その男の名は、名護友明。

彼は、弁護士だった坂城の孫を殺害していた。

だが、彼の精神状態、そして、犯行当時…未成年だったこともあり、彼は罪にはとわれなかった。

それに、死刑廃止論者であり、少年保護を訴え続けていた坂城は、遺族である立場よりも、自分の主張を貫いた。

しかし、彼はその事件後…弁護士業を廃業した。

そして、彼は長谷川の通う学校に、講師として招かれていた。

両親よりも、先に病院に着いた長谷川は、安置所に置かれた知佳子の遺体を見た。運ばれた時には、息をしていなかったらしい。

見るも無惨な姿になった知佳子の前で、長谷川は泣いた。

泣きながら、怒りを覚えた。

こんなことをした犯人を同じ目にあわせてやろう。

殺してやろうと。

両親が来た為、長谷川は安置所を飛び出した。

犯人は、犯行現場を離れずに、その場で、警察が来るのを待っていたらしい。

到着した警察に、名護はへらへら笑いながら、言った。

「坂城弁護士に、言ってよね」

精神異常者を気取る名護。

それは、再びマスコミの格好の材料になるだろう。

犯行直後、名護は坂城にも電話していた。

「先生とこの生徒…殺しちゃった…。なんか、前から走って来て、怖くって…殺しちゃった」

半笑いで、異常を演じる名護は、最後にこう言った。

「先生とこの生徒だから…何とかなるでしょ」

病院を飛び出し、犯人が捕まっている拘置所に向かおうとする長谷川。

遺族と会わしてくれるはずがないが、何としてでも会ってやる。警

察にも邪魔させない。

怒りが、長谷川を狂わしていた。

その時、唐突に携帯が鳴った。

だけど、出る気にはなれなかった。

無視して、走っているが、いつこつに電話は切れない。

留守電に切り替えていなかったからだ。

しつこい電話が、少しだけ、長谷川を現実に戻した。

携帯の画面を見て、長谷川は足を止めた。

「先生？」

長谷川の脳裏に、坂城の最後の言葉がよみがえってきた。

（何か知っている）

明らかに、坂城は知っていた。事件のことを。

自分が知る前に。

携帯は、鳴り止んだ。

画面を見つめた後、長谷川は踵を返すと、学校へと向かって走り出した。

走りながら、長谷川は坂城のことを思い出していた。

彼の過去を。

あの犯人との接点を。

長谷川は、自分の中の記憶を手繰った。

坂城は、かつて弁護士だった。

それは聞いたことがあった。

死刑廃止論者…少年保護…。

長谷川は思い出した。

弁護士の名前は、覚えていなかったが、孫を殺された弁護士。

しかし、彼は、遺族の立場よりも、少年を守る弁護士の立場を優先し、

少年の犯行時の精神状態の混乱を証明し、年齢も考慮し、犯人を擁護した。

その行動は、マスコミでも議論を巻き起こした。

遺族であるより、弁護士の立場を貫いた彼の行動に。

学校に着き、坂城の部屋まで走った長谷川は、勢いよく音を立てて、ドアを開けた。

「君らしくないな。ドアは静かに開けなさい」

いつもの書類の山の向こうに、坂城はいた。

「せ、先生……」

まだ息が荒い長谷川を、坂城はじっと見つめ、

「君の聞きたいことは、わかっている。妹さんは、すまないことになった。そうなる前に、本当ならば、私の手で決着をつけなければならなかったのに」

「先生！」

「私は自分の信念を変えることが、できなかった。当時犯人であった少年を、責めることができなかった。例え、産まれたばかりの孫が、殺されてもだ！なぜなら、私は今まで、このような事件にあわれた遺族を傷つけてきたからだ！」

坂城はディスクの向こうから、長谷川を睨むように見、

「そして、少年の無罪を勝ち取った。罪に、とうことができないとして！しかし、その結果……私は、君の妹さんの命を奪うことになってしまった。申し訳ない」

坂城は、頭を下げ…そのまま動かなくなった。

ただ全身を震わせ、

「私は、自分の信念に従った！そのことで、妻も娘も私から、離れた。それは、仕方ない。けどだ！時がたつ度に、信念に従ったはずの私の心にふつつつと、わき上がってくる感情が生まれ…大きくなった」

坂城の目から、涙が流れた。

「殺意だ！」

坂城は、ディスクを叩いた。

「殺意を抑える為、知り合いの誘いもあり、私は弁護士を辞め、この学校で働くことにした。書物やレポートで時間を潰し、自分を閉じ込める為に！」

「先生」

近づこうとした長谷川を、坂城は手で制した。

「そんな時、やつから、電話があった！私に会いたいと！私は思った！チャンスだと！孫を殺したあいつを殺せると！本当は、抑えることなどできるか！許すことなど、できるか！やつは、私の孫を殺したのだ！！」

そう叫んだ後、坂城は突然、苦しみだした。顔をしかめながら、

「しかし、そんな私の思いも、やつはお見通しだ！また、私の周りで、殺人を起こし、私に弁護を頼む！狂ったように、演じて！ぐは！」

突然、坂城は血を吐き出した。

「先生！！」

制止し振り切り、長谷川は坂城に近づき、絶句した。

坂城は自分で、腹を切っていたのだ。

「私は、今も死刑は反対だ！人が、他人の命を奪ってはならない！ならば…残った手は、これだけだ！罪を償うには」

「な、なんて馬鹿なことを！」

「わ、私は、ずっと思っていた。人が、人を殺すのは、憎しみや貧困…己が生き残る為に仕方なく…そんな理由だと思っていた！」

坂城は、長谷川の腕を掴み、

「違うのだよ！やつは…やつらは！人を殺すことは、ゲームなのだよ！単なるゲームなのだよ！」

坂城は絶叫した。

「ゲームのプレイヤーであるやつらに、怒りや感情を向けても、無意味だ！！殺された遺族が、怒り悲しむことなど…当たり前前の事だ

「やつらを殺したいなど…当たり前のことだ！」

坂城は、掴む手に力を込め、

「やつらのゲームの駒になるな！妹さんを殺された、君の怒りは私がよくわかる！」

長谷川の目を見つめ、

「君の中に生まれた狂気を、コントロールしろ！殺すだけでは、やつらに勝ってない！君ならできる！やつらを上回るプレーヤーに！やつらを支配しろ！飾りだけの狂気から、現実に戻してやれ！今だからわかる！殺人犯より、大切な人を殺された者の方が、狂気を持てる！」

「…」

「私は、この狂気をコントロールできなかった…」

「…先生！しかし！僕には」

「君は、何を学んできた！何を習ってきたんだ！」

坂城は、長谷川の肩に手を置き、

「人の心は、複雑だ！だが、単純でもある！人の生き方は、結果だ！結果に導く時、いろいろな道があり、その内の一つを選んだ後…
・最後に決めるのは、行くか行かないかだ！」

長谷川の肩を握りしめ、

「君の領域へ…奴等をゲームから、引き摺り降ろせ！」

「先生！救急車を呼びます！」

顔色が悪くなっていく坂城は、これ以上ほってはおけない。

携帯を取りだし、電話をかけようとする長谷川に、

「それよりも…君を呼んだ訳を言おう！やつは、私を呼んでいる。君は、私の代わりに、代役で行って貰う。やつと対峙しろ！被害者の遺族ではなく…精神科医として！」

「だけど…僕はまだ…」

「心配するな…資格などいい。君しか、やつとやりあえない。狂気を持った君しか…」

「先生！」

坂城は、そのまま意識を失った。

救急車に運ばれた坂城は、何とか一命を取り留めた。

数日後、名護は弁護士を、坂城と指名した。

しかし、坂城は入院中だ。

その為、代理として、拘置所の名護に、面会に向かったのは、長谷川だった。

マスコミの混乱を避ける為、裏口から拘置所に入った長谷川は、地味なグレーのスーツに、だて眼鏡をかけていた。

顔がおぼこい為、眼鏡をかけてみたのだ。

驚く程、すんなりの通った拘置所内。

坂城は、自分のもと事務所に働いていた弁護士の了解を取り、彼の名前を借りていた。まだ無名だった彼は、顔を知られてはいない。

「どうぞ…渡辺先生」

通された灰色の部屋。

ここが、長谷川の生涯の居場所になるとは、その時の彼には思いもなかった。

「へへへ」

狂ったように、笑みを浮かべながら、簡易デスクの向こうに座る名護を見つめた。

殺意が沸いてくる。

しかし、その殺意を向けてはいけない。

（今…殺すべきは、自分自身だ）

長谷川は、眼鏡を指先で押し上げた。慣れない眼鏡が、少し苛立たせ、逆に冷静にさせた。

「坂城先生！若返ったねえ」

笑みを浮かべながら、前に座った長谷川を見つめる。

馬鹿にしているのではない。わからないのを、演じているのだ。

長谷川は敢えて微笑み、その件には触れなかった。

しばらく微笑み合う。

長谷川は眼鏡の向こうから、名護の目を見た。

へらへらしている名護の目の奥の鋭さを、長谷川は感じ取った。

（確かに狂っていない）

長谷川は確信した。

無言が続く、何も言い出さない長谷川に向かって、名護は言った。

「坂城先生は、どうしたの？」

その口調の変化にも、長谷川はまだ微笑みながら、

「少し体調を壊されたので、今日だけは私が来ました」

「何しに？」

「あなたを弁護する為ですよ」

ただ微笑む長谷川に、名護は眉を寄せ、

「俺は、坂城先生と言ったはずだけど？」

長谷川は微笑みを止めた。

「なるほど…坂城先生に拘るんですね。どうしてですか？」

「どうして？」

その質問に、名護はさらに訝しげな顔をして、

「なぜ、そんなことをきく？」

「いえ…別に」

長谷川はまた微笑んだ。

そんな長谷川を、名護はじっと見つめた。

「ご心配なく」

長谷川は頭を下げた。

「私は、坂城先生と同じ考えです。人の尊厳を守る為、どんな方でも救う覚悟がございます。例え、家族を敵にしても」

そんな長谷川を凝視する名護に、微笑みながら次の言葉を述べた。

「坂城先生からのご伝言です。あなたの弁護を引き受ける上で、一つだけして頂きことがあります」

「なんだよ？」

長谷川は、名護を見つめながら、

「なに…簡単なことですよ！」

少し体を前に向け、

「単なるゲームです」

長谷川は、スーツの内ポケットか、二枚のカードを取り出した。

そこには、違った絵柄が、描かれていた。

地獄の絵図（針の山などが描かれている）と、噴火している山だ。

「今から、数問…私が質問します。その答えがどれに当たるか、答えて下さい」

長谷川の言葉に、名護は笑った。

「訳わかんねえよ！何だ、この絵は、あんた…俺を陥れようとして

るのかい？」

「陥れよう！難しいお言葉を理解できるんですね？」

「な、なんだと！俺は、ただ…怖かっただけだ」

慌てる名護に、そうですかと長谷川は頷いた。

「ご心配なく…このゲームは怖くありません。まちがいもありません。単なるゲームです」

長谷川は心の中で、冷笑した。

（はじめよう…互いのゲームを。どちらが、プレーヤーになれるか）

心の中で、深呼吸したあと…長谷川は、ゲームを始めた。

強引に。

「あなたの気持ちはどれですか？」

「は…あ？」

顔をしかめた名護に、長谷川は優しく言った。

「感覚で構いません」

名護は、疑ってるのか…答えない。

「ゲームは、お嫌いですか？」

「あんた？何がしたい」

名護は、長谷川に顔を近づけた。

「ゲームですよ」

「だったら、カードの意味は何だ！何を企んでいる」

長谷川は、微笑み、

「心配症ですね。でしたら、説明しましょう。地獄と噴火ですよ」

「見たままだろが！」

キレる名護に、

「そう…見たままです」

長谷川は、一枚のカードに手を伸ばした。

「でしたら、例として、私が取りましょう」

そして、噴火のとカードを取った。

「昨日までは、こうでした」

にこつと微笑んだ。

その笑みに、名護は一瞬怯んだ。

「質問を変えましょう。あなたが恐れ、やってしまったこと。その相手が、あなたに感じさせた恐怖は、どちらですか？」

その質問に、名護はさらにキレた。

「なんで！俺が、こんなゲームをやらなければならないんだ！」

長谷川は冷静に、

「でしたら、一度だけで結構です。一度だけでも…選んで頂けないと、坂城先生はお受けしないと…」

じつと名護を見つめた。

その有無を言わせない眼力に、

「クッ！」

名護は一枚のカードを手を取った。

その絵柄を確認した長谷川は、立ち上がった。

「ありがとうございました」

頭を下げ、部屋を出て行く。

「待つて！お、おまえ！」

名護を無視して。

部屋を出ると、名護の担当の精神科医がいた。

その医師に、長谷川は頭を下げると、横にいた刑事に言った。

「誠に申し訳ございません…。今回、彼の弁護は辞退させて頂きま
す。なぜなら、彼は狂っておりません。まあ…犯罪を犯したことが、
狂ってるというならば、そうですが」

長谷川は、また頭を下げると、そのまま拘置所を後にした。

名護が手にしたカードは、地獄。

今回、長谷川が用意したカードの意味は…。

噴火は、怒りや未知なるものへの恐れ…つまり、感情を表す。

地獄は、罰。

罰は、行動である。

彼は、恐怖という感情から殺したのではない。

罰という行動にでたのだ。

しかし、あのカードだけで、彼を判断できない。

長谷川の行動に警戒し、反応し、名護は明らかに理解していた。
それが、判断力のない人間に見えるだろうか。

あとは、担当の医師に任せる。

長谷川は、拘置所を出ると、眼鏡を外した。

二択。

長谷川は、眼鏡を握りしめた。

あの時、俺はどうして…知佳子を送らなかったのだろうか。

せめて…バスに乗せていたら…。

俺は、選択を間違えた。

人は後悔で生きている。

あの時こうしたら…。

しかし、一度選んだカードを戻すことはできない。

その思いが、狂気になる。

だ^がけど、俺は狂^かわ^ない。

決^けして…。

E
n
d
.

ファイル7 宿命

医師…長谷川正流は、友人と再会した。

檻の中で。

もう1人の主人公、

もう1人の二択者…

幾多流登場。

2人の男を隔てる机の真ん中に並んだ…二枚のカード。

それは、罪と罰。

噴火を描いたカードと地獄を描いたカード。

「へえ」

長谷川の前に座る男は、そのカードを懐かしそうに見た。

それから、軽く吹き出した。

「――失礼…プッ」

謝ったが、また軽く笑ってしまった。

そんな男を、長谷川はただじっと見つめていた。

真剣な長谷川の視線に気付き、男は肩をすくめて見せた。

「そんなに恐い顔するなよ。正流」

馴れ馴れしく話しかけてくる男の両手には、手錠がかかっていた。

長谷川は…ため息だけを發した。

「…」

しばし無言になってしまう。

普通なら、質問をしなければならぬが、この男には、無意味だからだ。

なぜなら、今回の事件そのものには、意味がないからだ。

幾多は…、自分に会いに来ただけだからだ。

クスッ。

幾多は笑うと、机の上に手錠をかけられた両手をのせた。

「これじゃあゝ選びにくいよ」

苦笑し、にたと口許を緩める幾多に、長谷川はやっと口を開こうとした。

その瞬間、唇の動きだけでそれを見抜いた幾多は、口をはさんだ。

「噴火は感情：罪を表し。地獄は罰を意味する」

幾多は長谷川の目を見つめ、微笑んだ。

「懐かしいなあ。君が、最初に二択したときのカードだ」

「…」

長谷川は口を閉じ、ただ幾多の目を凝視した。

「だけど…」

幾多は、手錠のかかった手で二枚のカードを掴むと、長谷川から視線を外さずに言った。

「罪や罰：そんなカードなんては、無意味だ。僕なら、ナイフを一本用意する」

「それが、今回の真相か？」

長谷川は、幾多を睨んだ。

「恐い顔をするなって」

幾多は机の上に左肘を立てると、頬杖をついた。

「皺になるよ」

右手で、二枚のカードをひらひらさせた。

もう彼の手からは、手錠が消えていた。

長谷川は、手錠が外れたことに驚くことはない。

幾多は自首して来たのだ。

だとすれば、何か仕込んでいることは確かだったからだ。

「君の二択は、まどろっこしいよ」

幾多はカードを置くと、立ち上がった。

「今、ナイフがあつたら、説明して上げるんだけどねえ」

そして、長谷川の横に立つと、顔を近づけ、ウィンクした。

長谷川は幾多に顔を向けると、睨んだ。

「おおゝこわっ！」

大袈裟に、飛び退いて身を反らす幾多。

「先生！どうしました」

突然、長谷川の後ろのドアが開き、2人の刑事が飛び込んで来た。

二十代の男と三十代の女。

2人は、自首してきた幾多をここまで連行した刑事であつた。

男は、手錠が外れている幾多に気付き、

「貴様！どうやって、外した」

慌てて銃を抜いた。

幾多はにやりと笑い、長谷川に言った。

「いい例えが、来たよ！正流！今が、まさに罰だ！警察という国家権力が使うやつさ！」

嬉しそうに、話す幾多に、男は妙な悪寒を感じた。

だから、引き金に指をあて、

「いいから！座れ！」

意気込んで見せた。

「正流！そしてね」

いたずらっ子ばい口調に、長谷川ははっした。

「や、やめろ！」

椅子から立ち上がり、男に向かって振り返った。

「え」

激しい銃声が轟き、狭い部屋に硝煙の臭いが漂った。

「い、幾多！」

長谷川は前を向き、幾多を睨み付けた。

「正流！これが、罪だ！」

幾多は両手を広げた。

男の刑事は…額から血を流し、そのまま、床に倒れた。

「く！」

長谷川は、顔を逸らした。

男の刑事は、隣にいた女の刑事に撃たれていた。

「よくやったよ」

幾多は女に向かって、拍手した。

女は無表情で、幾多に向かって頭を下げた。

「わかったかな？正流」

幾多は拍手をしながら、後ろで起こった惨劇に、震える長谷川の横をすり抜けると、女に近づいた。

女は深々と、幾多に向かって頭を下げた。

幾多は、長谷川の震える背中に目を細めると、少しため息を吐いた。

「特別だよ。正流」

幾多は女に向かって、手を差し出した。

女はその手に、拳銃を差し出した。

シリンダーが回る音に、長谷川ははっとした。

慌てて振り向いた長谷川の目に、

女に銃口を向ける幾多の姿が映った。

「や、やめろ！」

長谷川の絶叫を無視して、幾多は女に笑いかけ、きいた。

「どうする？」

女は顔を上げ、潤んだ瞳で幾多を見つめ、

「…幾多様の…思うがままに」

ゆっくり目を閉じた。

「幾多！」

長谷川が、止めに走ろうとしたが、それより速く、幾多は引き金を引いた。

「今が罰だ！そして…」

部屋に銃声が、こだました。

鮮血を撒き散らしながら、恍惚の表情で倒れる女。

幾多は無表情で、倒れた女を見下ろした後、

「今…罪になった」

長谷川に顔を向けると、にこつと笑いかけた。

「き、貴様！人の命を何と、思ってるだ！」

怒りで我を忘れた長谷川は、銃を持っている幾多に飛びかかろうとした。

「だから、君はぬるいんだよ」

幾多は、長谷川に銃口を向けなかった。

それよりも、つまらなさそうにため息をついた。

「幾多！」

しかし、長谷川は幾多に近づくことはできなかった。

撃たれた女は、最後の力を使って、長谷川の両足を掴んでいたからだ。

「な！」

長谷川は、その行動に驚いた。

バランスを崩し、尻餅をついた長谷川足に、血塗れの女が絡み付いた。

幾多はそんな2人を、見下ろしながら、

「君も、相手を支配し、選ばせるという方法を取っていないながら…君の二択は甘過ぎる」

冷やかな視線を送った。

「罰を与える警官も、簡単に罪を背負える。そんな単純な心理で、真実は見いだせない」

幾多は大袈裟に、首を横に振った。

「貴様！」

長谷川は何とか動こうとするが、出血多量の女が気がかりで、邪険にどかせられない。

「特別に、教えてあげるよ」

幾多はゆっくりと、銃口を長谷川に向けた。

「罪も罰も！意識も無意識も、関係ない！人の真理は、生と死だけだ」

「幾多！」

「僕は、生と死しか…選ばさない。所詮、罪も罰も…人の感情も、すべて生ある中に存在するもの。僕には、分類する意味もない。ただ…生きるか、死ぬかだよ」

冷たく言い放つ幾多に、長谷川はキレた。

「生きるか死ぬか…人は、そんな単純ではない！」

「下らない…」

幾多は引き金に指をかけた。

「君の口から、そんな言葉…聞きたくなかったよ」

「幾多！」

長谷川は視線を幾多に向け、目を逸らすことはない。

「馬鹿らしい…」

幾多は、銃口を下ろした。

そして、長谷川に背を向けると、

「君がいつまで、そんな下らないことを言えるのか…楽しみにしてるよ」

歩き出した。

「幾多ああ!」

長谷川の絶叫に、幾多は足だけを止めた。

「残念だけど…殺してあげないよ」

幾多は、女に撃たれて死んでしまった男に目をやると、

「君は、死んでもいいと思ったからさ」

近づき、腰を下ろした。

そして、体をまさぐると、上着の内側に銃を発見した。

「最後の選択は、僕に決定権がある。それが…」

幾多は、男の銃を左手に持つと、

「僕の二択だ」

また歩き出した。

「さて」

幾多は大きく欠伸をすると、

「帰るかな」

部屋を出た。

「幾多あああ！」

長谷川は足を掴んでいる女を振りほどいて、立ち上がろうとした。

力を入れたが、簡単に立ち上がれた。

女は笑顔のまま…絶命していた。

「え？」

立ち上がった瞬間、

長谷川は動けなくなった。

その女の笑顔は、幾多の笑みよりも、長谷川には、理解できないものだったからだ。

幾多は逃げる途中、数人の警察官を撃ち、まんまと脱出に成功した。撃つことに一瞬でも躊躇う人間が、幾多に勝てる訳がなかった。

彼の撃つ行為は、彼が与える死の選択でしかないからだ。

あれから、数年経ったが、彼は捕まっではない。

指名手配はされているが、彼は堂々と生きている。

なぜならば、彼にとって、警察はもっと殺すべき存在らしいからだ。

彼は、警官をよく狙った。

自らの生け贄として。

時には、裁判官も。

それは、罰を与える者は、自分だけだと誇示するかのように。

そして、彼はなぜか…女にモテた。

今も、どこかの女のもとにいるのだろう。

「ふう…」

長谷川は用意したカードを見つめながら、

深く息を吐いた。

（それでも）

長谷川は歩き出した。

次の事件に向かって。

ファイル 8 終わりと始まりもないもの（前書き）

男は応え、女は求めた。

だけど、二人には、始まりがない。

ファイル 8 終わりと始まりもないもの

何の装飾もない…冷たいドアを開けると、長谷川は部屋に入った。

四角い灰色の部屋の真ん中に、机が一つ。

その前に、男が1人いた。

長谷川は、男の前に座る前に、上着のポケットに入れていたカードを確認した。

その時、幾多の顔が唐突に、浮かんだ。

長谷川は奥歯を噛み締めると、カードを出すのをやめた。

いや、出す必要がないかもしれないからだ。

「失礼します」

長谷川は、男の前に座った。

幾多の事件から、部屋の外には、警官が待機していた。

「三宅哲郎さんですね？」

長谷川は事務所な口調で、哲郎に三宅に話しかけた。

「…」

男は虚ろな目で、机の上を見つめていた。

気付かない哲郎に、長谷川はそれ以上何も言わなかった。

ただ静かに、哲郎の前に座ると、その様子を凝視した。

これも、大切な材料となる。

しばし観察してから、おもむろに長谷川は口を開いた。

「三宅さん」

「あっ」

三宅は声よりも、長谷川の視線に気が付いた。

顔を上げた三宅の顔が驚きから、泣きそふな表情に変わった。

「お、俺は…」

40歳をこえたばかりの三宅が、まるで幼児のように見えた。

老けた…幼稚園児のようだ。

その瞬間の変化で、長谷川は三宅の性格を知った。

だが…それは、男なら誰でもあることだった。

子供ばい。

しかし…。

長谷川は睨むではなく、微笑むでもなく、限りなく自然な表情で、三宅を見ていた。

（大人などいるのか…）

フッ。

長谷川は、心の中で笑ってしまった。

今日は、変なことを考えてしまっ。

子供から成長しない男など、珍しくない。

そっ…三宅は患者なのだ。

自分は冷静に、診断するだけだ。

（！？）

いつも通り診断しようとした長谷川は…驚いてしまった。

いつのまにか無意識に、内ポケットに入れてあるカードに、手を当てていたからだ。

三宅哲郎に、殺害された2人の被害者の名は、遠藤茜と、滝村大毅。2人とも、哲郎の知り合いであったことが、確認されているが、茜と大毅が出会ったのは、意外にも最近であった。

茜は知らなかったが、大毅と出会ったのは、哲郎の手引きがあったからだ。

3人の関係。

それは、とても奇妙なことだった。

茜は、スタンディングバーの店員であり、哲郎はその常連であった。

ガールズバーに近いスタイルをとっていた…そのバーは、店員が女の子ばかりの為が、ほとんどが男性客であった。

その為、女の子目当ての客が多い。

哲郎もその1人だったかもしれない。

それは、あからさまではなかったが、茜がいる日になぜか…足が向かっていた。

若い頃に結婚し、30歳後半で、離婚した哲郎は、その店の近くのアパートに1人暮らしをしていた。

離婚の原因は、わからなかった。

妻から突然言い出し、突然離婚することになった。

一度、嫌と決めた女の動きは早い。

一週間も経たない内に、離婚届に判を押し、妻と離婚した。

その代わり、慰謝料は取られなかった。

1人になって間もない頃、哲郎はその店を見つけ、茜に出会ってしまった。

茜の初対面でも気さくで、接客くさくない態度が、哲郎に好印象を与えた。

そして、いつのまにか、ほぼ毎日…店に通うようになっていた。

バーのなのに、11時に閉まる営業時間がよかったのか、哲郎は最後までいることが、多くなった。

その理由は、居心地が良いのもあったが、女の子目当ての酔っぱらいが、閉店までいて絡んでいるのを見たからが、大きかった。

哲郎は、知らず知らずの内に、女の子を守る為に、店にいることに

なっていた。

しかし、それは…。

最初は善意であつたが、それが当然になった時、哲郎の中で、自分がただの客であるという意識ではなくなってしまつていった。

女の子を守ること。

頼まれてもいなかったが、哲郎はほぼ毎日、最後までいた。

そして、いつしか…その行為に酔いしれていた。

自分勝手だとしても。

そうなつてくると、女はしたたかである。

比較のおとなしそうに見えた哲郎を、逆に利用していくようになった。

特に、茜はうつすらと自分に好意を持っていることに気づいていた。だから、時に小声で、なかなか帰らない酔っぱらいに困っていることを、哲郎に告げることもあった。

普段おとなしい哲郎も、お酒が入っていることもあり、気が大きくなっている為、大声でその酔っぱらいを注意した。

茜に言われたことが、嬉しかったから、張り切ってしまった。

いつしか、客を注意する役割になっていった。

（なんだ、あいつは？）

他の客からクレームが来たが、店側は従業員でない為、哲郎が変わっているというだけで、すべての責任は哲郎にいき、店がデメリツトを負うことはなかった。

店に都合よくなった哲郎を、茜はさらに利用することになった。

仕事で、哲郎が来れない日や、店が休みで、友達と遊んで遅くなった時は、哲郎を電話で呼び出し、送りをさせていたのだ。

そついうことを繰り返す日々で、哲郎の店での態度が少し、変わっていった。

茜が他の客と話している時は、明らかに不機嫌になり、酒をよく飲むようになった。

そして、ベロベロになると、他の客に絡むようになったのだ。

もともと、他の客から評判が悪くなっていた哲郎である。

他の客から、苦情が多くなると、店側は…哲郎にあることを告げた。

出入り禁止である。

「なぜ…どうして…私には、理解できなかった」

長谷川の目の前にいる哲郎の瞳に、涙が浮かんだ。

状況が理解できない哲郎は、次の日も店に行ったが、入れてくれなかった。

茜に電話をしても、着信拒否にされていた。

納得できない哲郎は、1ヶ月近く、毎日店に行ったが、入れてはくれなかった。

時には、他の客から、しつこいと罵倒された。

「そこまでして…どうしていかれたのですか？明らかに、店側はあなたを利用していた。それなのに、どうしてです」

長谷川の質問に、哲郎は少し目を見開き、驚いた顔を見せた。

その顔は、なぜそんなことをいうのかと、長谷川に告げていた。

その表情に、長谷川はおかしなものを感じた。

哲郎はただ…利用されていただけでない。

そこに、理由があるのだ。

長谷川は内ポケットから、二枚のカードを取り出した。

そのカードは、単純に…男と女。

長谷川は、カードを机に置くと、

「あなたが、そこまで拘った理由は…これですか？」

長谷川は女のカードに手を添えると、哲郎に向けて前に出した。

哲郎は、困ったような顔をした。

どこかにはかんで…。

その表情に、長谷川はカードから手を離れた。

そして、哲郎を見つめ、

「真実を述べて下さい。それは、あなたの為にもなります」

「私の為ですか…」

哲郎は大きく、息を吐くと、

「私は別に良いんですが…彼女の為になるか…」

「彼女？」

長谷川は眉を潜めた。

「はい」

哲郎は、長谷川の顔を見ていない。

「それは…遠藤さんのことですか？」

「はい」

哲郎は頷いた。そして、カードを見つめ、

「本当は…本人から、話すことを禁止されていたんですよ。一応、私は店のお客ですし」

長谷川は、哲郎の話はあり得ないと思った。

周囲から、茜と哲郎の関係は聞いていた。

店側も、常連も…口を揃えてこう言った。

哲郎は、茜のストーカーだと。

そして、犯行前…茜は大毅とつき合っていたのだから。

「みんな…信じないでしょうね」

哲郎は笑うと、おもむろに自分の手を見て、

「だけど…私と茜は、男女の関係だったんですよ」

ゆっくりと握りしめた。

その様子に、長谷川は目を細めた。

誰もが知らなかった…二人の関係。

そこに、今回の悲劇が待っていたのだ。

「私は…茜と付き合っていたんですよ」

突然、哲郎は嗚咽した。

「うつつ…それなのに…」

長谷川は、哲郎の様子を観察して、それが妄想でないと悟った。

少し錯乱したのか…両手を虚空に這わす動きは、明らかに、あの行為を思い出していた。

長谷川は少し息を吐くと、椅子に座り直した。

そして、改めてきいた。

「あなた方、お二人がそういう関係だとして…。果たして、それだ

けで付き合ってるとは言えますか？」

長谷川の質問は、哲郎の心を抉った。

虚空をさ迷っていた手が、机を叩き、哲郎は立ち上がった。

「い、一度でも！そ、そういう関係になったら…そ、そうでしょうが！」

唾を飛ばして、むきになる哲郎を見つめ、

長谷川は心の中で、ため息をついた。

（真剣な相手には…そうだろうが…）

今までの会話で、長谷川は茜に対して、抱いていたイメージを変えた。

（したたかな…）

そう…したたかな女。

（そして…）

ある意味純粹過ぎる男。

長谷川は哲郎を見つめた後、男のカードに指を添えた。

もう1つ確認しなければならなかったからだ。

「滝村大毅…」

長谷川は男のカードを前に出すと、哲郎の目を見た。

「彼は、もともと…あなたの友人だった。それで、よろしいでしょうか？」

「はい」

長谷川の質問に一呼吸おいて、哲郎は答えた。

その口調には明らかに、怒気がこもっていた。

殺してもなお残る…怒り。

長谷川が、確認事項を続けようとするより速く、哲郎は言葉を続けた。

「友人といえますか…ただの飲み友達でして…。茜が働く店から、少し離れたところの居酒屋で出会いました。ほら…私は、茜の店に入れて貰えなかったから」

と、

そこまで言つて、哲郎はまた机を叩いた。

「あの店の店長ですよ！あのばあが、私と茜の仲を引き裂く為に、私を出入り禁止にしたんですよ！そうだ！あのばあにも、何か罰

を与えないと！」

錯乱状態になり、突然震え出す哲郎は、精神が安定していないようにも見えた。

薬物反応はなかった。

だからこそ、長谷川が呼ばれたのだろう。

長谷川はじつと、哲郎を見つめ、事務的に言葉を放った。

但し、少し声を大きくして。

「別の店で知り合った滝村さんに、あなたはその店を紹介した。いや、行ってくれるように頼んだ。お金まで渡してますね」

最初の取り調べで、哲郎はそう答えていた。

少しポカンとすると、哲郎のテンションはいきなり下がった。

「はい……」

か細い声。

声自体が、少し震えていた。

「そうです……」

長谷川は、認める声の中に、後悔の念をとらえていた。

なぜならば、哲郎が大毅を店に行かさなければ、2人は、付き合うことはなかったのだから。

「どうして、彼を行かしたのですか？」

その理由は、報告書に書かれていたが、改めて確認の意味も込めて、長谷川はきいた。

「そ、それは…」

哲郎は、泣きそうな顔になっていた。

（ガキだ…）

真剣な表情をつくりながら、心の中で、長谷川はため息をついていた。

しかし、そのガキが、2人を殺害したのだ。

長谷川は心の中も、引き締めた。

そんなことを考えてる内に、哲郎は話し出した。

「滝村君は真面目そうで…私の話をよく聞いてくれたんですよ。最後まで…」

少し嬉しそうに、哲郎は口元を緩め、

「だから…信用できるかなと」

（信用？）

長谷川は表情を変えずに、心の中で首を傾げた。

（そんな程度で）

長谷川は、哲郎の置かれている立場を知った。

孤独なのだ。

孤独だから、彼は単なる接客という笑顔を見せた茜に、魅せられた。

「彼が、私の代わりに、酔っぱらいから、茜を守るはずだったのに
いい！」

また、哲郎は声をあげた。

最初の内は、茜の店に行った次の日、居酒屋で報告をしていた大毅
は、段々と邪魔くさくなってきた。

それに、彼はそれなりに、見映えがよかった。

だから、哲郎のように、最後まで店にいても、結果は違った。

居酒屋に来なくなった大毅が気になり…いや、茜の様子が気になり、哲郎は店へと向かった。

いつも最後までいた哲郎は、従業員が帰る裏口を知っていた。

その近くで隠れて、様子を伺っていた哲郎は、目を疑った。

裏口のドアを開けて、出てきたのは、

茜と大毅。

2人は、手を繋いでいた。

哲郎は目を疑いながらも、2人の後をつけた。

数分後、2人が向かった場所は、駅ではなかった。

駅を通りすぎ、裏手にある…ホテルだった。

ラブホテルに仲良く入っても、しばらくは、今見た事実を、哲郎は認めたくなかった。

幻かもしれない。

見間違いかもしれない。

だから、哲郎は待つことにした。

建物の影に隠れ、幻でないなら、2人が出てくるまで。

11時半から、朝方まで、哲郎は待った。

その時間は、哲郎に殺意が芽生えさせるのには、十分だった。

2人が仲良くホテルから出てきた時、哲郎は鞆からナイフを取り出した。

そして、後ろからまず…大毅を刺し、驚き逃げる茜に襲いかかり、馬乗りになると、メッタ刺しにした。

始発に乗る為に、少し早くホテルを出た為、人通りはあまりなかったことが、助けを求める茜に誰も気づくことはなかった。

2人を殺害した後、血塗れで駅の周辺をさ迷う哲郎を見つけたサラリーマンが、警察に通報した。

捕まった哲郎が、なぜナイフを持っていたのかその理由について、口論になった。

最初から、殺すつもりで、茜の店に行った。

だから、計画性があったと、警察は主張した。

しかし、哲郎が、ナイフについて語ったことが、弁護側の理由になった。

哲郎は、ナイフを持たないと、不安なのだ。

誰かに、傷付けられそうだからと。

彼は精神的に、病んでいたのだと。

長谷川は、そう思わなかった。

やはり、ただのガキだ。

確かに、ナイフを持ち歩くことは病んでいるかもしれない。

そんなただのガキも、滅多に人を刺さない。

それも、後ろから。

彼は、身を守ることに使っていない。自分から刺しに行つたのだ。

「茜は、私のものだった！それを、あいつが！汚した！茜も、汚れた！」

長谷川は、興奮する哲郎よりも、

テーブルの上にある二枚のカードを凝視した。

店の店長は、2人は付き合っていると言ったが、果たして…そうだろうか。

「茜は、私の彼女なんだ！」

絶叫する哲郎の言葉を冷静に、長谷川は紐解いてみた。

茜を彼女と思う理由は、彼女と関係を持ったから。

彼女は、哲郎と関係を持ったが、最終的に彼を捨てた。

そして、彼女は、新たな哲郎の代わりになる男と、関係を持った。

その答えは、簡単だった。

彼女は体を許すことで、その見返りを求めたのだ。

誰もが、聖女ではない。

哲郎は関係を持つことで、茜を彼女と思い、さらに尽くすようになった。

しかし、度が過ぎたのだ。

それに、店や周りの評判もよくない。

だから、切り捨てた。

そして、大毅を選んだのだ。

（ふう…）

長谷川は心の中で、息を吐いた。

まだ興奮している哲郎を見つめた。

その瞳の奥には、憐れみがあった。

しかし、人を2人も殺した男に、憐れむ場合ではない。

長谷川は、立ち上がった。

すると、後ろのドアが開き、2人の刑事が部屋に入り、興奮している哲郎を取り押さえた。

二枚のカードを手にとると、長谷川は哲郎に頭を下げ、部屋を出た。

「先生、どうでしたか？」

廊下に残っていた刑事が、長谷川にきいた。

「少し興奮していますが、彼は正常でしょう。少なくとも、嫉妬している。そして、2人を刺した。男性の被害者は一度…女の被害者には、何度も。彼は、2人の違いを認識していた」

長谷川はそれだけ報告すると、刑事に頭を下げた。

「詳しくは、報告書にまとめて、提出しますので」

長谷川は刑事から離れ、灰色の廊下を闊歩した。

背筋を伸ばしながら、前を向いて。

（薬物は、使っていない。精神的に幼稚だが、おかしい訳ではない）
単なる嫉妬だ。

もし、恋愛が麻薬だとしたら、誰もが狂うだろう。

しかし、それは自己の中で、治さなければならない。
自分の心で。

男は女を抱いて、自分のものになったと完結した。

しかし、女はそれから始まり…吟味して、彼との関係を終わらした。

哲郎は、茜を彼女として、新たな関係が始まると思っていた。

茜は、よりよい方の男を選択しただけだ。

哲郎の選択は、終わっていた。

彼は、茜を諦めることができなかった。

長谷川は、哲郎を憐れと思った自分を恥じた。

彼は、2人を殺したのだ。

それを許すことはできない。

「だから、言ったでしょ。下らないとね」

「!？」

長谷川は足を止めた。

「君の方法…君のいる場所じゃ…真実を選べないよ」

（幾多!？）

長谷川は周りを見回したが、幾多の姿はなかった。

しばらく、周囲の様子を伺っていた長谷川は、幾多の声が、自分の記憶の底から溢れていることに気づかなかった。

「男女の揉め事なんて、普通過ぎてつまらないよ」

幾多は、せせら笑っていた。

（だけど…）

長谷川は、歩き出した。

（ここが、今は居場所だ）

長谷川は口許に浮かべた笑みで、幾多の笑いと戸惑いをかき消した。

今いる場所。進むべき道は、長谷川が自分で選んだ道だからだ。

終わり。

ファイル9 奴隷（前書き）

君は、僕の奴隷。

それ以外に、選択はさせない。

ファイル9 奴隷

「僕は…こう思うんだ」

「は、はい…ご主人様」

妙に敏感に反応する肌に、指を這わしながら、

男は優しく微笑みながらも、心の中では冷めていた。

（女ってやつは…）

どうせ、どうなるか…どうやるのかわかっている。

だから……。

身を任せ、頬を赤らめ、期待している女の表情に、

男は逆にやる気が、萎えた。

もうシミュレーションは、できている。

だから、男は最短距離を選んだ。

「あ」

ブリッジのように、身を反らした女が、満足そうに果てたのを確認すると、

男はベットから離れた。

「まったく…」

女が果てたからか…静かになった部屋に、外の喧騒が少し響くようになった。

ポケットから、ハンカチを取り出し、中指を丁寧にふきながら、男は窓の方に顔を向けた。

グラウンドで、青春を謳歌する学生達の様子を見つめていた。

男は元気な生徒達に、鼻を鳴らした。

「あらあ？健康的な若者に、珍しく惹かれてるのかしら？」

いつのまにか、男の前に、白衣を着た女が立っていた。

女は、保健室の女医だった。

女医はベットの上で、気を失っている女子生徒を見て、目を細めた。

「不健康なことをしてたみたいだね。幾多君」

窓を見ていたのは、幾多流だった。

幾多は女医の言葉に、肩をすくめて見せた。

「不健康ですかね？」

幾多はそれ以上何も言わずに、窓の外を見つめ続けた。

女医は少し口を尖らせると、幾多に近づき、彼の胸に手を置いた。

「いじわるね。あたしの場所で、あんなことをして」

指で、幾多の胸をなぞった。

しかし、幾多は何の反応も起こさずに、ただ…窓の外から目を離さない。

「何を見てるのよ」

女医は幾多の肩越しに、外を覗いた。

「また別の女を見つけたの……？」

幾多の視線を確認し、見てる方向に顔を向けたが、女はいなかった。

1人の男子生徒が、歩いているだけだった。

「男？」

意外そうに、言う女医に、幾多は軽く吹き出した。

「駄目ですかね」

幾多は、窓から視線を外すと、身を寄せている女医の顎に手をやり、キッスをした。

「もお！」

数秒後、唇を話した幾多を、女医は軽く睨んだ。

しかし、幾多はまた窓の外を見ていた。

もう男はいないが…。

「さっきの子…。長谷川君でしょ」

女医は、幾多が自分にあまり興味を示さないから、話題を変えた。

「…」

だけど、幾多は答えない。

「どうして、彼が気になるの？彼は…」

「頭脳明晰。品行方正」

女医の言葉を、幾多は遮った。

「僕のような遊び人とは、まったく違うと」

「そ、そこまでは…」

女医は、幾多を怒らしたと思ったが、

「!？」

幾多はまた唇で、女医の言葉を止めた。

そのまま抱き締め、立ったままで、女医を抱いた。

女子生徒と違い、気は失わなかったが、女医は腰が抜けたのか…その場でへたりこみ、立てなくなった。

幾多は平然と、また窓の外に目をやると、

「普通に勉強ができるやつも、今グラウンドに…いや、この学校にいるほとんどのやつを考えていることは、わかる」

幾多は笑い、

「下らない悩みばかりさ」

へたりこんでいる女医に、ウィンクをした。

「やつらの見てる世界は、下らないし、想像できる。だけど…」

幾多は目を細め、

「あいつの見てる…いや、これから見ていく世界は、僕には想像できない世界なんだろうなって…考えてた」

「幾多君…」

女医は乱れた白衣を直しながら、幾多を見上げた。

「僕が想像できない世界を見ることが出来る…あいつが、少し羨ましい」

幾多は頭をかいたら。

「だけど…」

そして、しゃがむと、女医と目線を合わせた。

「あいつも、僕の世界は理解できない」

「あつ」

幾多は、女医の両肩を掴むと、そのまま後ろに押し倒した。

「チッ」

幾多は軽く舌打ちした後、頭をかいた。

（何だろう？この虚しさは）

保健室を出て、廊下を歩く幾多は、少し苛ついていた。

その理由は大体、わかっていたが、クールでないと、自分を恥じていた。

学校自体は、嫌いではない。

しかし、そこに通う生徒が気にいらないのだ。

普段なら、そう思っているても、そんなことを考える暇はないのだが……。

残りの授業が終わると、幾多はさつさと学校を出た。

行く場所があるからだ。

ほぼ毎日通っていることが、自分でも信じられなかった。

そんな感情があることに、驚いていた。

もう一ヶ月は経つ。

幾多が真っ直ぐに向こう場所は、病院だった。

もう夜になると、病院は静かである。

夕陽が沈んで、月明かりが照らす中、幾多は、足音が響く廊下を歩いていた。

そして、ある病室の前で止まると、一呼吸おき、ドアを開いた。

灯りもつけていない病室に、幾多は入ると、奥のベッドまで歩いた。

そして、白いベッドの上で眠る女の子の顔を覗きこんだ。

「調子は、どうだい？涼子」

ベッドの上で、数多くのチープに繋がれた少女は、目を開けることはない。

その可能性すらない。

永遠の眠り…。

幾多の妹…涼子は、一生意識が戻らないと言われていた。

植物人間となった涼子は、自殺を計ったのだ。

その理由は、男女のもつれだと言われていた。

彼女は飛び降り自殺を行った。

しかし、運良く…死ぬことはなかったのだが、頭の打ち所が悪く、病院に運び込まれた時から、意識がなくなっていた。

それから一ヶ月。

涼子の怪我は治ったが、意識は戻ることはなかった。

脳死に近い状態だった。

そんな状態になっても、生きてほしいと願いを込めた両親は、延命処置を希望した。

だから、チーブに繋がれ、生命維持装置により、涼子はかろうじて生きていた。

（生きている？）

幾多はベッドの横で、椅子に座りながら、じっと涼子の横顔を見つめていた。

ここしばらくの苛立ちの理由は、ここにあった。

幾多の無意識に、拳を握り締めていた。

「うん？」

涼子に気を取られていたことと、部屋の灯りがついていなかったこともあり、幾多はすぐに、それに気づかなかった。

「花？」

綺麗に生けられた花は、昨日はなかった。

いや、ずっと花瓶には、花は生けられていたが、種類が変わってい

た。

「あの子が来たのか」

3日に一回は、見舞い来ている同級生。

幾多は、その友達の名前を知っていた。

長谷川知佳子。

あの日、幾多は自分の道を選んだ。

生と死を選択する者に。

その前に、兄として…最後の役目を。

幾多は、妹の通う学校に向かった。

妹が男ともめただけで、死ぬとは考えられなかった。

自分の妹である涼子も、相当モテていた。

そんな妹が、心を奪われる程の大恋愛をしたなら、幾多にもわかるはずだった。

妹の死が見つかり、自分に捜査の目が向く前に、幾多は、妹の恋人と言われた男の家の方に向かっていた。

無断で、妹の携帯を拝借し、幾多は登録してあるアドレスに、一斉メールをしようとした。

『皆さんには、ご心配をおかけしました。何とか意識も戻り、元気になり、本日退院しました』

と、メールを打った後、

一度、幾多は手を止めた。

少し考え込んだ後、改めて、さらに文字を打ちたした。

『本当は、出歩いてはいけないのですが…行きたい場所があるので、今夜…久しぶりに外に抜け出そうと思っています』

それだけ打つと、息を吐いた。

妹と交際していたと言われる男の住所は、入手していた。

自殺の原因となった人物だからだ。

警察は直接、親族と合わせてはくれなかったが、名前と住所がわかればいい。

涼子は、中学三年だった。

受験生が、塾に行かない場合は少ない。

それに、高校生と違い、塾に通うとしたら、地域内が多い。

そんなに、離れた場所ではないだろう。

幾多は調べ上げていた。

男が通っている塾を。

塾は6時から、9時まで授業を行っていた。

学生服を着た幾多は、平然とその塾の中に入った。

一応、その塾は大学進学コースもあつたからだ。

見学という名目で中に入った幾多は、高校進学コースを探した。

すると、教室は2つに別れていた。

どちらも、授業中だ。

だから、講師の声以外聞こえない。

幾多は携帯を取りだし、ある番号にかけた。

携帯の電源を切っていたら、アウトだ。

幾多は、携帯を人から見えないようにしてかけていた。

それも、涼子の携帯からだ。

廊下の奥の教室から、携帯の着信音が聞こえてきた。

「こらあ！山下！」

講師の怒声が、教室に響いた。

幾多は、教室の窓から、中を覗いた。

慌てて、携帯を切ろうと取りだしたが、ディスプレイに映る名前に、思わず山下は携帯を床に落とした。

幾多は少し口元を緩めると、携帯を切った。

そして、すぐに教室から離れ、塾からも出た。

「今夜が…山だな」

幾多は、月を見上げながら、真っ直ぐに、今夜の舞台に向かった。

自分の携帯をちらっと見ると、まだ自分には電話が入っていないかった。

「まだいける」

幾多はフツと笑うと、堂々と道を闊歩した。

塾が終わると、すぐに山下は、携帯を手に取り、ある番号にかけた。

「田端！い、幾多が、退院したって、本当なのか！お、俺に、で、電話がかかってきたぞ！」

山下は人に話を聞かれないように、塾を出ると、裏口に走った。

「い、意識が戻らないと言っただろうが！」

山下は携帯に向かって、叫んだ。

「ど、どうしたら…」

異様に震える山下は、しばらくかけている相手の話を、うんうんと素直に頷きながら聞いていた。

「わ、わかった…」

山下は携帯を切ると、少しふらつきながら、歩き出した。

その足は、実家には向かっていなかった。

そして、その数メートル後ろの街灯の光の届かない闇から、幾多が

出てきた。

「……」

無表情で、幾多はある程度の距離を取りながら、山下の後ろを歩き出した。

十分後、山下は学校に着いた。

そこは、涼子も通っていた場所。

そして、涼子が自殺した場所でもあった。

（やはり……）

幾多は、正門に向かわずに、裏口に回る山下の背中を睨んだ。

後を追おうとした瞬間、幾多の携帯が鳴った。

マナーモードにしていた為、周りに音がもれることはなかった。

（時間がないな）

携帯を切ることなく、幾多は歩き出した。

学校は思ったより、広い。

宿直の先生が残っているとはいえ、生徒の出入りをすべて、監視はできない。

裏口から忍び込んだ生徒は、山下の他に2人。

彼らは、職員室のある校舎からは死角になる北校舎と、別館をつなぐ渡り廊下のそばに集まっていた。

「まじなの？涼子が退院したって」

三人の中で、一番怯えているのは、ショートカットの柳奈津美。

「そんなはずはないよ。わたしは、病院まで確認に行って、確かめたんだから」

爪を噛みながら、イラついているのは、松下実花。

「俺は、知らないよ。か、関係ないじゃないか！なのに、どうして」電話があるんだよ」

山下雄大は、完全に怯えていた。

「今更、何言つてんだよ！あんたも、この話に乗っただろうがよ」

実花は、完全に怯えている山下を見て、さらに苛ついた。

「お、俺は…幾多がいなくなれば、希望校の枠があくからと…」

実花は山下をキッと睨み、

「だから、あんたはその枠に入れたんだろうが！」

「そ、そうだけど…」

山下はシュンとなった。

「あ、あたしはただ…木村君をフツた涼子が、許せなかったから…」

奈津美は、か細い声で口を開いた。

「みんな…あいつが、気に入らなかったのよ！あいつが、周りのやつにちやほやされているのを見る度に、許せなかった！」

実花は、爪を噛みきった。

「実花…」

奈津美は、実花をすぐるように見た。

「あの日、山下が涼子呼び出し、奈津美が後ろから、実花を殴つて、私と2人で渡り廊下から、突き落とした」

実花は、涼子突き落とした渡り廊下を見た。

「その前から、山下と涼子が付き合っていると噂を、ばらまいた。学校の裏サイトにも、書き込んで！だから、それを迷惑に思っていた涼子は、あんたの呼び出しに応じた」

実花は、2人の責任を確認するように、奈津美と山下を交互に見た。

2人は口をつむんだ。

「回りくどいメールだったけど…あの文は、私たちを呼び出して、ここに来いと言ってるのよ！復讐するつもりで！」

実花は別の指を噛むと、

「私たちは三人！逆に返り討ちにしてやるわ。そして、今度こそ、殺してやる！」

実花はポケットから、果物ナイフを取り出していた。

「怖いねえ」

三人の後ろから、ポケットに両手を入れた幾多が、現れた。

「今の中学生は、人を突き落としておいて、反省するんじゃない、さらに刺そうというんだから」

幾多は、後ろから実花のナイフを持っている腕を掴むと捻った。

「きゃあ！」

実花は思わず、ナイフを床に落とした。

さっと、幾多は腕を離すと落ちたナイフを拾い上げた。

「だけど、いいよ。それもね。人らしいよ」

幾多は笑った。

「あんた！誰よ」

腕を押さえながら、実花は幾多を睨んだ。

「話は、聞いたよ」

「え？」

三人が少し怯んだ時、幾多はノーモーションで、ナイフを突きだした。

「だけど、君は普通過ぎる」

ナイフは、実花の喉を一刺ししていた。

「単なる嫉妬。それも、直接本人と関わらず、ただ離れて見てただけの嫉妬」

幾多はすつと、ナイフを抜いた。

「下らない」

実花は血を噴き出し、倒れた

「きゃ……」

突然の出来事に、一緒啞然となった奈津美は、悲鳴を上げるのが、

一瞬遅れた。

その一瞬の間に、幾多は奈津美の腹に、蹴りを入れた。

悲鳴を最後まで上げることなく、渡り廊下まで転がった奈津美を見下ろしながら、

「黙れ」

幾多は、冷たく刺すような視線を奈津美に浴びせた。

そして、幾多はガタガタ怯えているだけの山下に、目で渡り廊下に行くことを命じた。

震える足で、山下は移動した。

2人が渡り廊下に並ぶのを確認すると、幾多はナイフの柄を拭くと、2人の間にナイフを投げた。

「君達2人の内…1人だけ助けて上げる」

幾多は微笑み、

「相手を刺した方をね」

「!？」

その言葉に、奈津美と山下は顔を見合わせた。

「早くしてよね」

幾多は、学生服の中から銃を取り出した。

勿論、モデルガンだが、夜であることと先程、実花を殺害したことが真実味を増した。

その銃口が、2人を急かした。

「ひいいい！」

ナイフを拾い、相手を刺した。

「やはり…君か」

幾多は微笑んだ。

真っ先にナイフを掴み、相手を刺したのは、山下だった。

震える手で、奈津美の心臓を一突きしていた。

幾多は目を細め、奈津美を見た後、

「彼女は、フラれた他人の為に、やった。君は、希望校に入りたい為…つまり、自分の為に、やった」

山下に目をやり、にこつと笑った。

「え？」

幾多の方を向いた山下は、突然眩しい光に照らされた。

銃を構えた右手ではなく、左手で幾多は、携帯を持っていた。

いつのまにか、殺した実花の携帯を探し出し、手にしていたのだ。

「便利だね。今は、証拠を送れる。君が、その子を刺したという証拠をね」

幾多は、今撮った写真を登録アドレスに一斉にメールした。

「あああ」

力いっぱい刺したナイフから、手を離すと、山下は頭を抱えだした。

「約束通り、君は殺さない。だけど……」

幾多は笑みを抑えながら、言葉を続けた。

「こんなことをしてしまった…君は、希望校には、いけないね。それに、これから大変だよ」

「あああ…」

山下はもう…幾多の声も聞こえない。

クスッと、幾多は笑うと、山下に背を向けた。

「選ぶがいい。自分の道を…」

銃をしまうと、実花の携帯を丁寧に拭くと、実花の遺体の横に落とした。

「まあ、選ぶ道は、2つだが…」

幾多は、渡り廊下を後にした。

少し階段を降り、外に出た時、鈍い音が校舎に響いた。

その瞬間、幾多は笑った。

「そうだ。それが、最善の選択だ」

山下は、渡り廊下から飛び降りたのだ。

これからの自分の未来を考え、最善の方を選択したのだ。

死という選択を。

裏口から、悠然と出てきた幾多の前に、深々と頭を下げる女が現れた。

「うん？」

幾多は足を止めた。

「お疲れ様です」

女は顔を上げた。

「こんなところまで、どうしたんです？先生」

幾多は微笑みかけた。

女は、保健室の女医であった。

「あなたを御迎えに」

女医は、潤んだ瞳を幾多に向けた。

「へえ」

幾多は感心した。

「もう警察の手が、回ります。その前に、あなたを安全な場所に」

女医の言葉に、幾多はきいた。

「どうして？」

女医は幾多を見つめ、微笑んだ。

「あたしは、あなたの奴隷です」

「そっか」

幾多も微笑むと、女医について行くことを決めた。

愛してるや、好きと言ったなら、幾多は女医の言葉を信じなかった。

奴隷の言葉に、納得したのだ。

「君の選択を、尊重するよ」

幾多は、女医の顎に手をやると、キスをした。

「どうして、でしょうか」

唾が糸引く唇を離れた後、女医は顔を赤らめながら、

「今までと、キスが違います」

明らかに、興奮していた。

「そりゃあ、そうだろ。僕は、生まれ変わったからね」

幾多は、自分の手を見た。

手を刺しても、延命装置を外し妹の命をたつても、自分の心は揺るがない。

幾多は確信した。

自分の道を選んで行けると。

幾多は、学校から少し離れたところに停めてあった女医の車に乗り込んだ。

運転席に女医は、座った。

「きちんと、褒美はあげるよ」

幾多の言葉に、

「ありがとうございます…ご主人様」

女医は礼を述べた。

幾多は微笑むと、またキスをした。

そして、車は静かに発車した。

次の日。

いつもなら、三日に一度だが、今回は間をあげずに、病院に来た。

昨日生けた花が、少し気に入らなかったからだ。

そして、病院に行った知佳子は、涼子の死を知った。

あまりに突然の出来事に、言葉を失った知佳子は、とぼとぼと来た道を帰っていた。

それに、知佳子を殺したのは…。

一瞬、すべてを信じられなくなったから、知佳子は途中で足を止め、携帯を取り出した。

信じる声を聞きたかった。

そして、かけた人間は…。

「あつ、兄貴…」

終わり。

ファイル10 美しき君（前書き）

血に染まりし故の

愛しき夢。

あなたは、ただ…美しい。

ファイル10 美しき君

坂城の代わりに、名護と対面した長谷川正流は、役目を終えた帰り道…かけていた伊達眼鏡を外した。

妹の知佳子の死を振り切り、歩き出した長谷川はふと足を止めた。

それは、普段はいつもある何気ない風景の一つであるが、いつもと少し色が違う為、長谷川の無意識の視線が、それをとらえたのだ。

「赤い…月？」

血のように、熟した果実のように、赤い月。

伊達眼鏡を外した長谷川は、その異様さに足を止め、目を奪われた。

そして、最寄りの駅まで歩くはずだったのに、月に魅せられた長谷川は、拘置所近くのバス停に、タイミングよく滑り込んできたバスに吸い込まれるように、乗り込んでしまった。

運命とは時に、残酷な程…無慈悲な時がある。

まったく違う2人が、混じる時、それは、神の残酷さに似た反応を起こした。

バスに飛び乗った長谷川は、無意識のまま、チケットを取ると、一

番後ろに座った。

「…当バスをご利用頂き、誠にありがとうございます。当車両は、途中…」

車内に流れる無機質なアナウンスを聴きながら、さっきまでの緊張の為か、長谷川はバスの揺れについて、うとうとし、寝てしまった。

その為、今から起こる惨劇の始まりを見ることはなかった。

「あああゝ！」

絶望にも似た大きな溜め息をして、運転席の後ろに座っていた男が、突然立ち上がった。

「あああ！」

今度は、車内に座る乗客に聞こえるように言うと、

「どうして…こんななんだろうなああああ！」

と叫び出した。

そして、おもむろに席から離れると、運転手の横に行った。

「お客さん？」

前を見て、ハンドルを握る運転手の首筋に、男は上着の袖口の中に、

隠していたナイフを突き付けた。

「恐ろしいよね〜え！よ・の・な・！か！こんな簡単に、運命が決まるのだから！」

最初、男の行動に無関心だったバスの乗客も、男のナイフに気付き、慌て始めた。

だけど、全員がパニックになることはなかった。

腕に覚えのある者は、何とか隙を見て、男を取り押さえようとしていた。

そんな状況が不満なのか…。

バスジャク犯になった男は、切り札を乗客に見せつけた。

着ていたカッターシャツを片手でめくると、腹に巻き付けた時限式の爆弾が姿を見せた。

それが、だめ押しとなり…隙を狙っていた人々も、迂闊に手を出せなくなった。

「へえ〜」

ざわめく乗客の中で、先程まで何の関心も示していなかった男が、爆弾を纏った犯人に初めて興味を持った。

犯人が座っていた席の真後ろにいた男の名は、幾多流。

幾多は、男の腹に巻き付けた爆弾を凝視した。

見た感じは、本物のようだ。

次に、男の身なりから、学生…それも、大学生であることを感じ取っていた。

その理由は、簡単だ。

この日本で一番暇なのは、学生。

それも、大学生や専門学生だ。

彼らは受験戦争を終え、後は就職するだけだからだ。

リクルートスーツを着ていても、明らかに浮いている男は、就職活動中だろう。

だとしたら、面接の帰りかもしれない。

それに、さつきから、男はバスジャクをしながらも、金などを要求していない。

「走れ！止まるなよ」

運転手の首筋に、少しナイフを押し付けながら、にやにやと笑っていた。

まるで、恐怖を与えることだけを楽しんでいるような。

こんな子に、誰がしたんでしょうか。

幾多の能力は、その洞察力だった。

（学生だが…何か退廃的な雰囲気があるな）

心の中で探りながら、幾多は犯人の心理を分析していた。

楽しんでいるように見えて、やけくそのような印象を受けた。

（成程…思い通りにならなかったか）

学生の時代が終わると、社会にでる。

今まで好きにやっていた環境が、変わる。

同世代の集まりから、世代をこえた付き合いになる。

就職活動の途中で、おかしくなる者はいる。

特に、爆弾を作れる程…優秀なやつなら、尚更だ。

（そんな中での不満や、不安が、こういう行動に出させたか）

幾多は欠伸をした。

（最初から用意してたのか。興味深いが…退屈だなあ）

バスジャクなどはやりやすい。

密室内で簡単に、恐怖で支配できる。

しかし、バスの周りには…広い世界が広がっている。

つまりだ。

いずれ、バスの中から出た時、すべては終わるのだ。

「おい！おっさん！右に曲がれ！」

犯人はナイフを突き付けた運転手に、公道を離れるように命じた。

（なるほど…一応、考えてるのか）

公道を外れ、山の方へ向かうバス。

幾多は、そのバスの中で、少しの違和感に気づいていた。

自分と反対側に座っている三人の学生。

パニックになり、バスの後方に集まっていた人々と違い、彼らは参考書や、教材を読んでいた。

その中の1人が参考書を閉じると、携帯を開き、時間を確認した。

そして、溜め息をつく、席から立ち上がった。

「おっさん。もうやめてくれるかな？塾に間に合わなくなるだろ」

一番前に座っていた学生が、犯人の前に来た。

「貴様！座っている」

犯人がナイフを、運転手から学生に向けた。

「お前達は、恐怖して、大人しく！す、座っていたら、いいだよ！」

ナイフを向けても、平然としている学生に、犯人は戸惑い、震えながら、ナイフを向けた。

「大丈夫だよ！こんなやつだ」

立ち上がった学生の後ろにいた女子学生も席から離れた。

「殺す度胸なんてないよ」

その後ろにいた屈強な体躯をした学生も、立ち上がった。

無言で、2人の後ろから犯人を睨んだ。

「俺らだけでも、降ろしてくれないかな？忙しいんだよ。俺らは」

偉そうに、少し威圧的という学生に、犯人はキレた。

「どうして、てめえらのいうことを、きかなくちゃいけないんだよ！なめるな！」

学生の言い分に、犯人はさらにキレた。運転席から離れ、ナイフをさらに学生に向けた。

その時、ぬうつと犯人と学生の間横から、腕が伸びて来て、犯人の腕を掴み、そのまま捻った。

「ぎゃああ！」

変な形に曲げられた腕から、ナイフを奪ったのは、幾多だった。

「!？」

突然、三人の前に現れた幾多に、三人の学生は驚いた。

幾多は、学生達に笑いかけると、

「素晴らしい。君達の自分勝手な考え」

幾多は右腕で、犯人を締め上げながら、

「だけど…」

今度は笑みを止めると、冷やかな瞳を向けた。

「気に入らない」

幾多はそのまま腕に力を込め、犯人の腕を折った。

そして、背中から奪ったナイフを突き刺した。

「ヒイ」

いきなり男を刺し、ナイフを抜くと、血が噴き出した。

その血を気にすることなく、幾多は学生達を見た。

「君達の言い分だ」

幾多は、きいた。

「なぜ自分だけ助かるうとする？」

「てめえ！頭がおかしいじゃないのか？」

一番前にいた学生が震えながらも、強がってみせた。

その時、バスは突然急停止した。

バスの惨劇をバックミラーで見ていた運転手は急停止すると、運転席から出ようとした。

「ちょっと待ってて」

幾多はまた、学生達に笑顔を向けると、恐怖からか慣れているはず

の運転席から出ることに、もたついている運転手に向かって走った。

「ヒイヒイ！」

悲鳴を上げた運転手の脇腹から、血塗れのナイフを突き刺した。

「狂っている」

学生達も、後ろに下がった。

バスが止まった為、何とか後ろの出入口から脱出しようとする乗客達で、車内はまたパニックになる。

しかし、扉は開かない。

運転手を刺した後、冷やかに乗客の様子を見ていた幾多は、せせら笑った。

「みんな…自分だけ助かりたいのか。フツ…まあ、人間らしいか」

「あいつ、狂ってるよ」

女子学生は携帯を取り出すと、警察に電話した。

「もしもし…」

警察に状況を説明している女子学生を、幾多はただ見つめると、腕を組んだ。

そして、電話が終わるまで待った後、

「警察が来るまで、どうする？」

女子学生に聞いた。

そんな幾多に、バス内の乗客に戦慄が走った。

乗客の動きが止まり、ただ前にいる幾多を見た。

幾多は、乗客の数を数えた。

「…10人もいるじゃないか。一斉にかかったら、勝てるかもよ」

幾多の言葉にも、乗客は動かない。

なぜなら、バスの通路は狭く一斉には、襲いかかれない。

でも、そんな分析ができる者はいなかった。

理由は、恐怖だ。

幾多はクスツと笑い、ナイフを向けた。

「警察が、来るのが早いかな…。君達が全員死ぬのが先かな…。試してみようか？」

幾多はナイフの血を拭くと、ゆっくりと歩き出した。

「どうして、何だよ」

窓を開けて、逃げようとする乗客もいたが、中々開かない。

そんな様子に、幾多はうんざりとしていた。

「俺達が、何をしたんだよ」

学生の叫びに、幾多はこたえた。

「そうだね」

幾多は軽く首を捻り、考え込んだフリをすると、

「君達の考え方だよ」

学生に笑いかけた。

「自分だけ、助かろうという考えさ」

幾多の言葉に、

「俺達は、塾に行きたかったただけなんだ！これを、さっきのやつに邪魔され、行けなくなっただんだ！どうして、こんな目にあわなければならないだよ！」

学生の主張に、幾多はこたえた。

「それが、人生だよ。予定通り行かない…。自分が思うようにはね。そんな時、どうするのかで…。人は己の本質を垣間見せる」

幾多は、笑みを浮かべていた口許を引き締め、目を細めた。

「と、思うだろ？君も」

バスの後部座席にいた男が、パニックになる人々の間をかき分け、学生よりも前に出てきた。

そして、盾になるように立つ男を、ただ…。幾多は見つめた。

「ここまでやる必要は、ないだろ。考え方だけで、人を殺す必要があるのか」

一番前に出てきたのは、長谷川正流だった。

あまりの疲れで、深い眠りに落ちていた長谷川は、運転手が刺されたところから目が覚めていたが、そこからの壮絶な出来事に、どう対応していいのか、わからなかった。

今もわからない。

だからこそ、前に出た。

警察が来るまで、何とか食い止める為に。

幾多はそんな長谷川に、肩をすくめると、

「その通りだよ。だけどね」

長谷川を睨み、

「そんな人の自分勝手な考えや、行動が…犯罪を生み、被害者を増やす。犯罪とは、こんなやつらがいるところで発生するんだよ」

幾多は、乗客を見回した。

長谷川は、正論に聞こえる幾多の言葉に、虫酸が走った。

そんなことを偉そうにいう幾多の手には、人を刺したナイフが握られているのだ。

「君のいうことには、筋が通っていない」

長谷川は、自分と同じ歳くらいの幾多に、何とも言えない恐ろしさを感じていた。

さっきまで、拘置所であった犯罪者よりも、異質な感じを受けていた。

しかし、逃げる訳にはいかない。

なぜなら、前に立つような人間と話せるのは、この中では自分だけだからだ。

（君の領域にやつらを導くんだ）

坂城の言葉が、頭に浮かんた。

しかし、目の前に立つ幾多には、どうすればいいのか…わからなかった。

今、幾多にナイフを突き付けられたら、逃げる術はない。

時間を稼ぐ為にも、何か言わなければならないのに、

言葉がでない。

そんな長谷川を見て、幾多は苦笑すると、バスの前へと歩き出した。

「成る程…そうかもしれないな」

幾多は頷くと、ちらつと通路に転がる遺体を見てから、前の降り口を一步降りた。

そして、下から、長谷川に顔を向け、

「ここは、狭い。外で、ゆっくりと話さないか？君となら、話ができそうだから」

それから、その後ろの乗客達にも声をかけた。

「他の方も、文句があったら聞くよ。外に、おいでよ」

しかし、そんな幾多の言葉を信用するものはいない。

外に出て、あわよくば逃げられるかもしれないが、もうすぐ警察が来る。

動かない方がいいと、判断する者が多かった。

それに、警察が来ることを知っている幾多が、逃走する可能性もあった。

逃げてくれてもいい。

皆、そう思った。

だから、幾多の言われた通りに、外に出る為に歩きだした長谷川の行動を、乗客は信じられなかった。

（逃がす訳にはいかない）

長谷川は、どんな犯罪者よりも危険な感じがする幾多を、このまま逃がす訳にはいかないと思っていた。

だから、外に出ることにした。

その時、長谷川がもつと冷静ならば、多くの人々を助けることができたかもしれない。

犯人の死体を跨ぎ、運転手の横を通ると、長谷川は外に出た。

先に外に出て、待っていた幾多は腕を組み、バスから降りてくる長谷川を見つめた。

そして、長谷川の足が地面につくと、幾多は顎でついてくるように促し、バスに背を向けて歩きだした。

「どこにいくんだ！」

長谷川は、バスから離れていく幾多の背中を追いかけた。

幾多は、長谷川に見えないように、にやりと笑った。

「よかった…何とか、間に合ったよ」

「え？」

「君なら…選んでくれると思っていたよ」

幾多が振り返り、長谷川に微笑んだ。

と同時に、凄まじい爆音が、辺りの空気を切り裂いた。

バスのガラスが吹き飛び、車体が一度浮いた。

悲鳴はしなかった。

車内はすぐに、燃え上がり、中にいた人々がどうなったかは、確認せずとも明らかだった。

「美しい」

爆音に驚いて、思わず振り返った長谷川は、そのまま動けなかった。そんな長谷川の耳に飛び込んで来たのは、予想も着かない言葉だった。

「な」

長谷川は、その声で体の緊張が解けて、幾多の方に顔を向けた。

幾多は、愛しそうに長谷川を見つめていた。

先程から、幾多が浮かべていたうわべだけの笑みとは違った。

しばし…その視線に、長谷川は不覚にも、目を奪われた。

幾多は静かに、口を開いた。

「爆弾は、稼働していた。どうやら、さっきの男は最初から、みんなを巻き込んで死ぬつもりだったようだね」

幾多はバスに目をやり、

「…あのバスにいた乗客は、助かることができた。しかし、彼らは選ばなかった。自分のことばかり考え、他人を助ける行動を示さなかった」

「な」

「だけど…君の行動は」

幾多は微笑み、

「美しい」

長谷川を見つめた。

「…」

あまりの予想外の言葉に、長谷川は何も言えなくなった。

遠くで、警察のサイレンが聞こえてきた。

「フッ」

幾多は笑うと、長谷川に背を向けた。

「ま、待て！」

長谷川は、幾多を追いかけてようとしたが、次の言葉に動けなくなった。

「君の妹さん…知佳子は、残念なことになったね。彼女には、僕の妹も世話になったしね。御悔やみを申し上げるよ」

幾多はゆっくりと、歩きだした。

「また会おう…正流」

幾多は道を外れ、山の方へと消えていった。

「…誰だ」

長谷川は、目を見開いた。

自分の名も、妹の名も知っていた。

愕然とする長谷川の後ろでは、バスがまだ燃えていた。

山道を、軽い足取りで歩く幾多の後ろから一台の車が追い越すと、止まった。

幾多は、ゆっくりと車に近づくと、何も確認せずに扉を開け、中に入った。

「お疲れ様です」

幾多を迎えに来たのは、かつて幾多と長谷川が通っていた高校の先生だった。

「ご苦労様」

幾多は、助手席に深々と座り込んだ。

静かに発車した車のハンドルを握りながら、女は口を開いた。

「幾多様…。今回は、なぜこのようなことを？」

「別に意味はないよ。ただ…」

幾多は笑い、

「正流が、こっち側に来たプレゼントのようなものさ。それに…」

「…」

女は前を向きながら、口を閉じた。

「あそこには、人の社会で生きていく資格がある者がいなかったからな」

幾多の言葉に、女は無表情を装いながら、きいた。

「一般の人間なんて…そんなものではないですか？」

「フン」

幾多は鼻を鳴らすと、

「そんなことはない。人は素晴らしいよ」

女に笑いかけた。

「こう見えても、僕は人を信じてるんだよ。みんな…優しくなれるってね」

女はその言葉に微笑むと、

「あまり…無茶をなさらないようにして下さいね。あなた様に、もしものことがあれば…」

幾多は、女の横顔を見つめると、ゆっくりと手を伸ばし、女の足に指を這わした。

「心配するな。お前のような女を置いて死ぬことは、ないよ」

「い、幾多様！う、運転中です！」

女の体が、ビクッと反応した。

その瞬間、車も左右に揺れた。

「あ、危ない！」

何とかハンドルを切り、体勢を整える女の体に、指を這わせながら、幾多は耳元で囁いた。

「別にいいだろ？2人ではいるんだから…。それに」

幾多は息を吹き掛け、

「お前となら、死んでも構わないよ」

「い、幾多様！」

女は、急ブレーキを踏むと、

「ああ！」

恍惚の声を上げた。

終わり。

ファイル11 他人事（前書き）

自分を守るのは、自分だけ

ファイル11 他人事

○月某日。

すべてを終わらすことに決めました。

理由は、簡単です。

私は、生きてはいけなからです。

ただ…それだけです。

一枚の遺書を残し…彼女は死んだ。

私は、彼女を救うことができなかった。

いや…もう出会った時、彼女は死へと向かっていたのかもしれない。

市内に大きな病院で、彼女を見掛けた時から。

私という存在は、ただ…偶然出会っただけの…意味のないものだったのかもしれない。

長谷川正流はため息とともに、かけていた眼鏡を外した。

そして、今回の物語を思い出していた。

心療内科のある病院の待合室に、彼女と彼氏はいた。

それは最後の希望だった。

彼女の名は、戸川優子。

彼氏の名は、岬拓真。

患者は、戸川優子の方であった。

彼女は、精神を病んでいた。

その病気になった理由は、病気ではなく…病院であった。

この話を話す前に、心療内科というものについて述べよう。

数年前、法律が改正された為、精神科医が心療内科を名乗ることができるようになったが、真の心療内科は、精神科とは異なる。

心療内科医は、手や指先で吐血など患者の状態を診ることができないといけない。

もともと内科医とは、そういうものであったが…最近の若い医者は、指先で患者を診断することはできない。

そんな内科医とわかる為に、経験と技がいる心療内科はわけられたのだが、精神科医との混同が、心療内科というものを混乱させている。

患者1人1人と向き合う心療内科医は、簡単にデパスなど薬を出すことはしない。

あなたの掛かり付けの医者が、あなたの体を診ずに、薬を出したならば、真の意味の心療内科医でないとと言える。

戸川優子という患者は、薬により…精神病になった人であった。

彼女は最初…近所の町医者に、階段から落ちたという打ち身から、通うことになった。

町医者は、彼女に痛み止めを所用した。

そして、元来から胃が弱かった彼女は、胃薬もいつしよに貰った。

しかし、強い薬である痛み止めは彼女の胃を刺激した。

執拗に痛む彼女を見て、町医者は検査をすすめた。

血液検査である。

血液検査の結果…胃はおかしくないことが判明した。

その代わり…膀胱炎のおそれがあると、血液検査は告げた。

町医者は、彼女を診察台に寝かすと、膀胱炎の薬を塗った。

その瞬間から、彼女はおしっこが止まらなくなり、その夜…彼女から血尿がでた。

町医者は首を傾げた。

おしっこが止まらなくなった彼女は、水分不足から日射病に似た脱水症状になった。

喉が異常に渇くようになった彼女を、町医者はまた検査をした。

そして、塩分が足りないと出たデータを見て、彼女に塩分を採ることをすすめ、やつれている彼女に塩分補給の注射をするようになった。

戸川が病院に通うことになって、1ヶ月近くたった頃、彼氏とある岬は違和感を覚えるようになった。

打ち身で通うことになった彼女。

それなのに…まったく違う診断をされている。

おかしく思った彼女にきいても、しんどいから通っているとしか言わない。

そんな彼女が飲んでいる薬を確認した岬は、啞然とした。

薬は四種類。

三つは、種類の違う胃薬と、

安定剤だけだった。

一向に治らずに、いろんな病気が始めた戸川は、息切れが激しくなり、胃が激しく痛むようになった。

仕事にもいけなくなった彼女に、町医者が渡したのが安定剤だった。

戸川が安定剤を飲むと、安心して動けるようになった。

しかし、その代わり…幻覚を夜に見るようになった。

誰もいない部屋に、誰がいる。

叫び回ったり、泣き出す。

夜中は、さらに精神的に不安定になっていた。

服も着れない時があった。

そんな姿を見た岬は、町医者に行かないことをすすめた。

しかし、苦しい彼女は、いかなければ…息もできないと主張した。

安定剤を飲まないと、動けないと。

だったら、一度…違う病院にいこう。

岬は、戸川を説得した。

少しは心の中で、いつ治るのかと不安があった戸川は、渋々頷いた。

しかし、町医者に相談すると言った。

戸川の話に、最初は渋っていた町医者も…喉の乾きを訴える姿を見て、渋々、紹介状を書いてくれることになった。

予約を取り、市内の大きな総合病院にいった時、長谷川は戸川を見かけることになる。

長谷川は、知り合いのお年寄りの付き添いで来ていたのだ。

戸川と岬は、予約をとっていたとはいえ結構待たされ、戸川が診てほしかった喉の乾きと胃の痛みではなく、尿の異常で診断されることになった。

泌尿器科の医師は、戸川を見ずに、こう言った。

「入院して下さい」

町医者 of 検査結果だけを見て、入院をすすめる医師。

岬は、夜中の戸川の奇行を知っている為、入院したら頭がおかしいと思われることを懸念した。

それと、データしか見ない医師に違和感を感じた。

患者を見ていない。

戸川と岬は、総合病院を後にした。

何も診てもらったことなく、お金だけを払った。

その夜。

彼女の奇行は、激しくなった。

岬の名前を忘れ、ただ泣きじゃくる。

夜が明けても、顔色は悪く、ますます行動もおかしくなっていた。

岬には、そんな戸川の体が悪いとは思えなかった為に、安定剤を飲むことを禁じ、町医者に行くことも禁止した。

「他を探そう」

と説得し、1日だけ…安定剤を飲まずに様子を見ようと提案した。

その日は何とか、普通に過ごし、

「大丈夫かも」

と戸川も安心しだした。

しかし、その次の日…再び胃が激しく痛みだした。

戸川は、岬が仕事でいないのをいいことに、町医者に行き…注射を射って貰った。

最初は、痛みが落ち着いていた戸川であるが、数時間後豹変し、狂い出した。

連絡を受けた岬は、会社を早退し、戸川のもとに向かった。

それから、何日も…岬は会社を休むことになった。

まともな時もある。

しかし、ほとんどは理解できない。

別人格のようになった彼女を見て、岬は町医者と話することになった。

「変な薬や、注射をするのはやめてほしい」

「…」

「幻覚を見たり、訳わからないことを言ってるんだ」

「ご本人は、苦しいとおっしゃってますが」

「…だったら、それより弱い薬を」

「あなたは、薬でこうなったとおっしゃいますか？」

その時、町医者は笑っていた。

「神経性だ？」だけど、データにはそんなことは出てませんよ」

その医者 of 言葉を聞いた瞬間、岬はその医者の本質を知った。

例え．．．患者が痛い苦しいと言っても、検査してデータに出なければ、悪くないのだ。

だから、少しでも、数値がおかしいと出たことしか治療できないのだ。

岬は、その医者と会話する価値がないと、電話を切った。

今考えると、戸川はパニック障害になったのかもしれない。

病院に通っても治らない自分と、本当の痛いところを治療しない医者。

岬は、再び薬に頼りだした戸川に言った。

「薬を飲まないくれ！でないと．．．俺は」

それは選択だった。

薬か、自分か．．．。

最後の手段として、藁をも掴む思いで、岬はネットで調べた。

そして、見つけた評判の心療内科と小児科を兼ねる医者のもとに、

戸川を連れていた。

70を越えた医師は、戸川の体を指で診察し、話を聞き……………
痛い部分も調べた。

しかし、異常はなかった。

「悪いところはない！」

年取った医師は、きっぱりと言いつつた。

その言葉が、戸川に久々の笑顔を与えた。

ただし、神経が過敏になっていると。

できるだけ、楽しいことを考えるようにと言い、薬は出さなかった。

笑顔が戻った戸川であるが、一度おかしくなった神経は簡単に戻らない。

もともと神経質だった為、治そうと思う程、神経を使い……………眠れなくなった。

今度は、睡眠障害を起こし、夜中も昼間も意識がはっきりせずにごすようになり、暴れ叫び回った。

たまに意識がはっきりする時があるようで、そんなときは疲れて衰弱している岬に気付いた。

今思うと、二人は若く．．．結婚もしていなかった。

時間をかけて治療する暇もお金もなかった。

トイレも垂れ流すようになり、恋人である岬の名前が浮かばなくなつた時、戸川は決意した。

死である。

意識がはつきりとしている間に、戸川がナイフで自らの首を切り裂いた。

買い物にでていた岬は帰って来て、鮮血に塗れた戸川を見て．．．その場で崩れ落ちた。

「先生．．．」

狭い部屋の中で、長谷川と向き合う岬は涙した。

「俺は．．．薬をやめさすべきではなかったのでしょうか？どうした．．．よかったのでしょうか？何を選択したら．．．よかったのでしょうか！」

「・・・」

長谷川は何もいえなくなつた。

戸川が自殺した後、岬は町医者のもとに行き、彼を刺し殺したのだ。

「あいつは、笑ったんだ！優子が苦しんでいるのに！」

岬はその場で、駆けつけた警察に逮捕された。

診察中の病院を襲うという事件は、精神を疑われたが、

「こいつが、優子を殺したんだ」

と主張する岬は狂っていないと、警官や弁護士を見つめた。

「こいつを野放しにしていると、優子のような患者をつくることになる！」

岬は泣きながら、絶叫した。

長谷川は、岬を見つめた。

彼は、狂っていない。

自然と．．．ため息が出た。

「先生．．．」

そんな長谷川に、岬はきいた。

「優子は．．．医者に行くべきではなかったのでしょうか」

長谷川は息を飲んだ。

（そんなことはない．．．行くべきだ）

本当なら．．．そう言いたかった。

しかし．．．その言葉は出なかった。

口ごもる長谷川に、岬は最後に告げた。

「病気を治すのは．．．医者ではなく．．．自分自身なんでしょうね。だけど．．．」

岬の目から、涙が流れた。

「壊れた心は．．．どうしたら治ったのでしょうか．．．」

岬との面会は、終わった。

岬に頭を下げ、部屋を出た。

昨今．．増え続ける患者をこなす為、データに頼る医師は多い。

そんな中、増え続ける精神を病んだ患者と向き合うには、一人一人に合ったケアが必要なはずであるが．．．はたして。

犯罪を犯した人間と．．一人一人向き合う自分。

人は、それぞれ違うからだ。

「だけど．．．」

長谷川は先程．．こたえれなかった答えを呟いた。

「医師も人だ。患者が、選ばなければならない」

岬は言った。

病気を治すのは、医者じゃない。

「自分自身が、守るしかないのかもしれない．．．」

岬がやったことを、許すことはできない。

が．．．しかし．．．。

「．．．．」

長谷川は言葉を飲み込み、ため息に変えた。

そして、ゆっくりと廊下を歩き出した。

命の重み．．．心の痛み．．．。

ただ．．．真剣に向き合わなければならない。

二択（他人事）

終わり。

ファイル12 麻薬（前書き）

あなたに会うためのお薬

ファイル12 麻薬

「雄太！雄太！」

錯乱状態にある彼女の診断を終えた。

彼女に明確な殺意はあった。

（しかし・・・）

長谷川は伊達眼鏡を外すと、目を閉じた。

そして、彼女の親友が語った話を思い出していた。

あたしが翠から、彼氏を紹介されたのは、いつものカフェだった。

普段なら、二人でランチの筈なのに、翠の横には、男がいた。

大して男前ではなかったけど…。

「友達の有希」

と翠が紹介すると、すぐに席を立ち、頭を下げる態度と、その時の優しい瞳がとても印象に残った。

好印象ってやつだ。

体型はがしっとりしていたけど、穏やかで物静かな性格は、彼氏彼女という二人の空間に、お邪魔なあたしがいても、あまり気を使うことがなかった。

今まで男運がなかった翠にやっと、幸せが訪れたように感じて、あたしは二人に微笑んだ。

彼の名は松木雄太。

誰よりも落ち着き、誰よりも優しい目をしていた。

穏やかな口調。

何かあると、

「ありがとう」

とすぐに、頭を下げた。

ほんの何気ないことで。

例えば、コップを取ってあげるだけで。

ありがとう、ありがとうと感謝の言葉を述べる。

菩薩のような人と、周りで言われていた。

そんな雄太のそばにいる翠はとても幸せそうで、彼女が笑顔でいることが、多くなった。

そんな翠が、彼氏について衝撃的なこと告げたのは、いつものランチ。

二人だけのときだった。

翠が昨日のデートを嬉しそう話した後、少し会話が途切れたので、

「松木さんって、お仕事何されてるの？」

あたしが何気なく質問した事が、のちの事件に繋がるのである。

「彼…無職なの」

「無職！…そ、そうなんだ…」

あたしは、聞いてしまったことを少し後悔した。

そんなあたし様子に気付き、

「仕事は探してるよ。今日も知り合いの運送会社に面接に行ってるし」

翠は、テーブルに置いてあるミルクティーに手を伸ばし、ストローで啜った。

「そうなんだ…よ、よかったね！」

あたしが安心して、胸を撫で下ろした時、翠はグラスを置くと、テーブルに肘を付き、あたしから視線を外すと、呟くように言った。

「仕方ないよ…。彼、出所したばかりなんだから」

「え？」

目を丸くするあたしを、頬杖をつき、上目遣いで見ながら、翠が雄太について、語ったことはあたしの想像をこえていた。

「ちょっと！聞いた！有希」

ワンルームマンションに帰宅したあたしの携帯に、陽子から着信があった。

慌てて出ると、いきなり興奮した陽子の声が、耳に飛び込んで来た。

「翠の彼氏って、ジャンキーなんだって！それも何度も捕まってる常習犯！」

陽子は、翠の高校時代からの友達で、あたしより付き合いは長い。

あたしは、服を着替えながら、

「でも、今は出所して、薬もやめてるって」

携帯で話ながらだから、なかなか着替えられない。

「それに、何度か会ったことがあるけど、とても優しくって、紳士的だったけど」

あたしの言葉に、はあ〜と陽子は呆れた。

「あんたは、見かけに騙されてるだけ！昨日ラブホ行った話聞いた？」

「ううん…聞いてない」

やっと着替え終わったあたしが、ベッドに腰掛けると、陽子の怒りに震えた声が聞こえてきた。

「あの子ら！ホテルでハシシ吸ったらしいのよ？」

「え？」

聞き慣れない言葉に、あたしは素頓狂な声を上げた。

ハシシとは、大麻の根だ。

それをアルミに包み、火をつけ、パイプで吸うのだ。

「その男！薬やめてないからね！」

陽子の怒声も、ショックであたしの耳には入らなかった。

友達が麻薬をやっているという事実。

「まったく！その男はどうなってもいいけど！あの子どつすんのよ！」

陽子の怒りはおさまらない。

「明日！あたしも行くからね！」

と言うと、ブチッと電話が切られた。

少し耳鳴りする耳を気にしながら、あたしはベッドに倒れ込んだ。

今はショックで、何も考えられなかった。

「薬か…」

自分には、遠い世界だと思っていたのに。

疲れているのに、あたしはしばらく眠れなかった。

次の日。

あたし達のランチに乱入した陽子は、こっぴどく翠を叱った。

「大丈夫だって！心配しすぎ」

「そんな男！やめろ！彼女に、薬やらすなんて最低だよ！」

どんなに陽子が言っても、別れる気はないらしい。

「だって…他の誰よりも優しいよお」

うつとりと恋する乙女の目になる翠に、埒があかないと思った陽子は、翠の携帯を取り上げると、強引に雄大に電話をかけた。

仕事中だとしても関係ない。数秒後、通じた雄大に、陽子は、話した。

「もしもし〜突然すいません。あたし！翠の友達ですけど…」

陽子は単刀直入に言った。

「あんたらのことに口出ししたくないけど…あたしの友達に薬をやらすな！絶対やらすな！今度吸わしたら、ぶっ殺すからな！」

警察に何度も捕まってる相手に、よくそんなタンカがきれるなあ〜と、あたしが感心していると、陽子は携帯を切った。

「はい！」

携帯を突き返す陽子に、翠は膨れっ面で言った。

「いい人なのに…。もうちゃんとやめて、働いてるのにさ。ハシシだつて…あたしが…吸ってみたいって…」

その言葉に、陽子はキレた。

「あんたね！」

テーブルを叩き、立ち上がった陽子が、何度注意しても、翠には通じていない。

それが、恋してるってことだし…。

あたしもあの雄大が薬をやってるなんて、信じられなかった。

陽子の真剣な忠告が効いたのか、翠自身は一切薬をやらないことを約束させた。

それから、数週間、幸せな生活は続いた。

雄太の麻薬のことは、あたし達3人しか知らないから、彼の性格の良さは周りで評判になっていった。

だけど、その落ち着きと穏やかさと優しさは、本当の雄太のもので

はなかったのだ。

雄太は今度捕まったら、そういう薬をやめさせられる為に、強制的に病院に収容されることになっていた。そして、入るとなかなか出れないことが確定していた。

だからこそ．．雄太はやる量を制限していた。

そのことは、体には少し良かったが、翠との関係を壊すことになった。

薬が切れると、落ち着かなくなり、雄太は本来の性格を浮き彫りにした。

シヨップ店員である翠は、もともと人付き合いは多い方だった。

だから、男友達から電話はよくあった。単なる電話であるけど．．．雄太とはその度に口論になった。

時には暴力を振るうこともあった。

殴られても、普段の雄太を知っている翠は、許していた。

今の彼が、おかしいのだ。

薬がキレた雄太こそが、おかしいのだと．．。

そう思った翠は、雄太に薬を飲むことを、積極的に進めた。

飲むと、誰よりも優しくなり、穏やかになる。

（ああ…これこそが、あなたの本当の姿なのよ）

翠は、穏やかな雄太に抱かれながら、何度も心の中でそう思った。

「ごめんな．．」

「いいの」

それだけで、翠は幸せだった。

しかし、そんなことは、長くは続かない。

人の体は慣れるのだ。

いつもの量では、効かなくなってきた。

翠のすすめもあり、雄太の薬の摂取量は多くなってきた。

体に悪いのはわかっている。

だけど、今の雄太のそばにいる為には、薬は必要だった。

イライラし暴れる雄太もまた…今の自分ではないと思っていた。

だから、薬の量は増え、それで気持ちは落ち着いても、体は蝕まれていった。

そして、ある日…もう戻れなくなっていた。

あれほど澄んでいた目に、影がでてきたのだ。

精神は、落ち着いても、体は悲鳴を上げていたのだ。

自分の顔を見た雄太が、ひくぐらいのひどい顔になっていた。

だから、彼は減らすことにした。

人は死の影がちらつくと、やっと気付くものなのだ。

仕事を段々と休みがちになった翠が、あたしに電話をかけて来た。

「どうしたらいいの!」

悲痛な叫びに、あたしは携帯に叫んだ。

「どうしたの! 翠!」

翠は声を震わしながら、答えた。

「薬をやっている彼が、本当の彼なんだけど…。もう薬が、効かなくなってきたし…薬を買いお金もなくなってきたし…」

「翠！？」

「あたし…どうしたらいいのか…わからない！！！」

「翠…やっぱり、病院に入れる方がいいよ」

「だめ！」

翠は声を荒げた。

「そんなことしたら！彼が、ジャンキーだとわかってしまうわ！彼の尊厳に関わることなの！あたしは、彼の尊厳を守りたいの！」

翠の矛盾した叫びに、あたしは顔をしかめ、

「尊厳って何？彼の尊厳って何よ！薬やってるんでしょ！」

思わず、あたしも声を荒げた。

「あたしは！」

そう言うてから、翠は泣き出した。

「嫌だよ…」

しくしく泣き出す翠に、あたしは何も言えなくなった。

「あたしの…雄太がいなくなちゃうよ」

それが、電話で聞いた最後の声になった。

「翠！あんた！」

あたしのへの電話を切った後、陽子からかかってきたけど、翠はでなかった。

そして、数分後、仕事を終えた雄太が帰宅した。

翠のマンションに転がり込んでいた雄太は、晩ご飯をせがんだ。

しかし、翠が差し出したのは、薬だった。

「さあ…あたしの雄太になって」

微笑む翠を、雄太は無視した。

「なんか今はいいや！腹減ってるしさ」

雄太は翠に背を向けて、テレビのリモコンを持つと、電源を入れた。

「それにさ！最近、やらなくても、落ち着けるようになってきたんだ」

その言葉を聞いたとき、翠は手に持っていた薬を落とした。

わなわなと震えだし、そして…翠の瞳から涙が流れた。

「今のあなたが、いなくなるなんて嫌…」

「え？」

泣きじゃくる翠に気付いたけど、雄太は無視して、しばらくテレビを見ていた。

数分後、

「まだかよ」

聞いても返事がないから、振り返ろうとした瞬間、後ろから翠は、雄太に抱きついた。

「み、翠…」

「今のあんたは…違うわ…」

振り返った雄太が、目にしたのは、知っている翠の顔ではなかった。

目を血走らせ、恐ろしい表情をした翠は、雄太を睨みながら、

「あたしの雄太を返して!!」

手にしていた包丁を、背中から一気に突き刺した。

胸騒ぎがしたあたしは家を出て、翠のマンションを目指した。

一駅しか離れていない翠の家についたあたしは、その惨劇を目にした。

チャイムを鳴らしても返事がない為、あたしは鍵がかかっていなかったドアを開き、中に入った。

そして、包丁を握り締めた翠を見つけた。

「み、翠」

血塗れになった翠は、あたしに気付き、微笑んだ。

「有希…。あたしの雄太が、いなくなっちゃたの…。あたしの雄太が…」

あたしは、血溜まりに倒れている雄太に気付いた。

「あ、あんたが…雄太さんを」

震えが止まらないあたしの視線の先を見て、翠は言った。

「ああ…」

翠は、床に倒れている雄太を蹴り、

「こいつじゃないわ…。こいつは雄太じゃない」

またあたしを見て、

「だって、雄太は優しくて、とっても穏やかで……いつじゃないの」
首を横に振った。

「ねえ……有希？」

翠はきいた。

「あたしの雄太には、どうやったら、会えるのかしら」

そこから、あたしは覚えていない。

その後、マンションに来た陽子によって、警察に通報され、翠は捕まった。

麻薬……大麻……LSDなどが、部屋からは大量の押収された。

あのまま……雄太が薬でぼろぼろになるまで、飲まし続ければよかったのか。

あたしは思う。

女にとって、最高の麻薬は恋ではないのか……。

有希の話から、大筋は理解できた。

翠は、雄太の為に麻薬をやめさせるべきだった。

と、簡単には言えない。

彼女が愛したのは、麻薬でつくられた雄太なのだから・・・。

（しかし・・・）

長谷川は再び、眼鏡をかけた。

（それは、許されない）

麻薬をやることを許すことはできない。

彼女の選択は、最初から間違っている。

そこに、愛があっても……………。

数カ月後、刑務所から有希宛てに手紙が来た。

翠からだ。

文面は簡単だった。

【雄太に会いたい】

と、だけ…。

終わり。

ファイル13 悪の罫（前書き）

この世に、正義はない。

あるのは、悪の罫だけ。

ファイル13 悪の罠

「君は、この世に…正義があると思うかい？」

幾多流は、笑いながらきいた。

「物語や…もしかしたら、君の中にはあるかもしれない。だけどね」

幾多は頬杖をつき、

「社会にはないのさ」

僕を見つめた。

「あるはずがないよ。あるのは、権力だけだ」

昨今増え続けている凶悪犯罪。

未解決事件が増え、検挙率が減っていく。

そんな状況を重く見た警察は、あることをし出す。

検挙率を上げる為、はたまた…警察のデータベースの資料を増やす為に、軽犯罪の一斉検挙である。

有名なのが、大阪の電動自転車の検挙である。

ある日、あまり大々的に人々に報せることなく、始まったこの検挙は、昨日まで普通に乘っていた人々を…今日から無免許と呼び、捕まえた。

自転車の違反も突然、厳しくなっている…。

知り合いがくれた自転車が、盗難車の場合…貰った者も罪に問われる。

指紋をとられ、写真を写される。

その時、警察はこう言う。

「本当は…控訴になるはずですが…大した罪でないのに、今取った資料は…警察以外には、漏れない。前科もつかないと」

まあ…貰った自転車を確認しなかったのは、悪いが…それが拘束される理由になるのだろうか。

あまりにも行き過ぎだと思い、弁護士に相談したとしても、控訴されていない場合…裁判にかけることができない。事件にならない。警察で止まるからだ。

つまり、警察を訴えることができないのだ。

普通の日常を過ごしていた…河東は、ある日…警察に止められた。

ラッパに憧れる彼の格好は…確かに、目立ってはいたが…。

普段は真面目に過ごしている河東は、週末だけは…Bボーイ系の格好をして、クラブに通うのが好きだった。

ノリノリで帰る彼が近道をしようと、大きな公園に入った時、三人の警察に呼び止められたのだ。

体につけた貴金属が、警官の持つライトに照らされた。

「何をしてる？」

少し高圧的な警察の態度に、何もやましいことはない河東はムツとした。

だから、こう言った。

「ただ…帰ってるだけです」

その言葉が、一人の警察をいらつかせた。

「ちょっと鞆の中を見せてみる」

「どうしてですか！」

その言葉が、反抗的に思ったのか…警官は反無理矢理、鞆の中を物色しだした。

「これは、何だ？」

そこにあつたのは、ナイフの形をしたキーホルダーだった。

勿論、切れる訳がない。

なのに、警官は河東を銃刀法違反で捕まえた。

「切れる訳がないでしょ！」

河東の言い分が、通るはすかなかった。

「詳しくは、署で」

ここで、河東の罪は決まった。

もう逃げることはできない。

銃刀法違反となるのは、刃の長さ6センチを超えるものが対象となるが、それ以下でも軽犯罪となり・・・拘留できる。

警官の判断で。

河東の件は、それに当たるだろう。

警察署に連れていかれた河東は罪を認めない為、何時間も拘留された。

日が変わり．．朝が近づいてきた時、気弱になってきた河東に別の警官が告げた。

「今なら．．大した罪にならないよ」

写真と指紋を取ることはなるけども。

「それで帰れるよ。後．．誰か身元保証になる人がいたら」

警官がそう言った時、取調室に他の警官が顔を出した。

「この子の知り合いが来たようです」

「え!？」

河東は驚いた。勝手に、誰かに連絡したのだろうか。

大学生である河東の自家は、県外にあったので．．親はすぐに来ることができなかった。

それに、わざわざ夜中に迎えに来てくれる友達に心当たりもなかった。

「じゃあ．．写真と指紋を取ろうか」

河東は、別の部屋の連れていかれた。

そこは、パソコンの並ぶ．．小さな部屋だった。

四人の男がいた。

まずは写真。

「お前がやってみろ」

ここの責任者に言われ、若い不慣れな男が、写真を取る。

失敗が多い。

前や斜めなど数カット撮り、今度は指紋。

画面に指を押し付けられ、回転させられ．．．くまなくとられる。

目の前の、ディスプレイに．．．自分の指紋が映り、データがとられていくのがわかる。

その時も、若い男がやり．．．何度も失敗。

落ち込んでいる河東には、拷問のような時間だった。

上手くいかないから、ついに他の男に変わった。

その時、河東の耳に信じられない言葉が飛び込んできた。

失敗した若い男が、河東を捕まえた警官に言っていたのだ。

「練習したいから、もっと捕まえて下さいよ」

背中越しに聞いたその言葉が、河東の落ち込んだ心を怒りに変えた。

すべてが終わり・・・最初の部屋に戻った河東は、見知らぬ男に会う。

「大変だったね」

席に着き、河東を見上げたのは・・・幾多だった。

「わざわざ・・・来てくれたんだぞ」

警官に促され、幾多の隣に座る河東。

後は、河東と身元保証人である幾多が、書類にサインをするだけだ。

幾多は、前に座る警官にきいた。

「この子が持っていたものを、見せてくれますか？」

「・・・これです」

警官は、ビニール袋に入ったキーホルダーを見せた。

「これですか」

幾多は手を伸ばさず、顔を近づけると、ニヤリと笑った。

「こんなもので・・・」

そして、立ち上がると、

「警察は、本物を知らないようですね」

幾多は腕を警官に向けた。

何のない手の袖口から飛び出してきた刃が、警官の額に突き刺さった。

「これが、危ないナイフですよ」

幾多は微笑みかけると、素早く机を回り、椅子から転げ落ち…悲鳴を上げる警官から拳銃を奪った。

「これからは、身元保証に来た者もチェックしたらいい!」

「どうした!」

防犯カメラで様子を確認し、警官の悲鳴を聞きつけた他の警官が、部屋に飛び込んで来た。

幾多は発砲した。

「この国には、警官を裁く機関がない!だから、権威の悪意が生まれる!」

署内に、警報が鳴り響く。

駆けつけた警官を撃ち殺した幾多。

「残念ながら・・・君達より、経験が多くてね」

倒れた警官から、拳銃を拾うと…撃ち尽くした拳銃は服の中にしまった。

下から、凄まじい音がして、建物が揺れた。

幾多の配下の女達が、待合室を爆破したのだ。

混乱が、署内に広がった。

「ヒイイ！」

混乱の中、パニックになっていた河東に、幾多は近付いた。

「君には、選択権がある」

幾多は、机の上で頭を抱えている河東に、銃口を自分に向けてから…銃を差し出した。

「僕とは無関係と主張し…このまま日常に戻るか？それとも」

幾多の言葉に、恐る恐る顔を上げた河東は、銃口を睨みながら、

「無関係と言って、警察は信じてくれますか？」

幾多にきいた。

「さあ。気分次第じゃないかな？」

幾多は笑った。

「だつたら……」

立ち上がった河東は、幾多から銃を受け取った。

「うわああ！」

それから、幾多は写真と指紋をとられた部屋に向かった。

幾多の仲間は、大勢いた。

銃撃戦と爆破の煙の中、逃げようとしている男達に、河東は銃を向けた。

若い男を撃ち殺した。

他の三人は、幾多が殺した。

そして、河東は、指紋をとられたパソコンの画面を撃った。

すべてが終わり、爆破の音だけが響く警察署を後にした河東と幾多は、河東が捕まった公園に来ていた。

「で、どうする？」

幾多の質問に、河東は笑ってこたえた。

「もう戻れませんから」

「そうか…」

幾多は頷き、銃口を向けた。

「君の選択を叶えよう」

銃声が、深夜の公園に轟いた。

「終わりました」

「ああ…」

公園の入り口に止まっていた車の後ろに、幾多は乗り込んだ。

静かに、発車する車の中で・・・ハンドルを握る女がきいた。

「男性を助けなかったのですか？」

その質問に、幾多は苦笑した。

「無理だよ。警察に捕まった時点で、助からない。後は、警察の言

う通りにするしかないよ」

「不当な逮捕として、訴えたらどうですか？」

「裁判になっていないのに無理だ。すべてに、罪がないとは言わないが．．．．今回のような件でもね。起訴されない軽犯罪のほんどが、泣き寝入りだよ」

幾多は、煙が上がっている方を眺めていた。

「それに．．．あの男は、感情を選び．．．銃を撃った。そして、警察も感情で捕まえた。まあ、もともと警察は感情の生き物だから、大した事でなければ見逃すこともある。だけど、不平等なのは．．．警察を裁く組織がない」

しばしの無言の後、女は再びきいた。

「警察は、正義でないのですか？」

幾多は即答した。

「正義が、金を貰うかね？検挙率を気にするかい？データを集める為に、逮捕するかい？例え、犯罪が起こった時に、犯人を特定しやすいとしてもね！それは、つまり．．．すべての民衆を疑っているということになる」

そう言った後、ため息をつき、

「捕まえる犯罪者がいないと、存在しない組織が正義とはいえないよ」

「．．．．」

「法は正義だというのが、単なる力だよ」

女は前を見つめ、

「だったら．．．正義はどこにあるのですか？」

幾多は前を向くと、バックミラーに映る自分を見て、

「少なくとも、ここにはない。勿論．．．この国にもね」

幾多の言葉に、女は瞼を落とし、

「どうすれば．．．何事もなく過ごせるのでしょうか？」

「そうだな．．．」

幾多は笑いながら、悩む振りをして、

「どこにも行かずに．．．引き籠る。それもある意味正解だな。
でも、一番の答えは．．．」

女は、バックミラーに映る幾多に目をやった。

幾多は無表情になると、

「ないよ」

とこたえた。

「え？」

驚く女に、幾多は微笑んだ。

「だから．．．強くならないといけない。心を鍛えなくてはならない。何事にも負けない心を持つ。例えば：相手が法に守られていてもね」

「．．．．．」

「敢えて言つと．．．自分の信念を持つ。それくらいかな」

「幾多様」

女は潤んだ目で、幾多を見た。

幾多はシートにもたれると、車の天井を見て、

「今の質問：今度、秀流にきいてみよう。なんて、こたえるかな」

楽しそうに笑った。

そして、近づいてくるパトカーと遠ざかる消防車のサイレンを聞きながら、

「政権が変わった：この国。本当に何が変わるのか：楽しみだよ」

ゆつくりと、次の戦いに備えた。

完。

P・S

「そういえば、知ってるかい？仮面ラ。ダーに出て来るショッカーって組織の目的は、人類に番号をつけて、管理することだったらしいよ！はははは！」

幾多は笑い、

「残念だったね！ショッカー！」

番外編 自由

数十年前まで、世界は自由ではなかった。

いや、真の意味では数年前まで、自由ではなかったかもしれない。

インターネット。

それが、新しい自由を民衆に与えた。

しかし、その為に浮かび上がったのは、さらなる不自由であった。

雑居ビル内にある…とあるバー。

そこに、与党の政治家が飲みに来ていた。

その店は、政治家になる前からの行き付けの店であった。

だからこそ、政治家とそうでないときの裏表を周囲に見せていた。

「何かしてくれとか、いろんな式に電報をくれと頼まれるだけだよ。その度に言われるのは、次も投票しますといいやがるんだよ」

政治家は、手に持っていたグラスをカウンターに置き、

「そんなこと当たり前だろが！いちいち言うことか！」

突然、怒り出した。

時々、テレビに出ているが、その時は満面の笑みを浮かべる彼が、身分で差別する人間とは知られていない。

地元の名家の出身である彼が、どう選挙を勝ち抜いて来たのか、想像はできるであろう。そして、結婚した相手への条件。

まあ…それは、個人的である。

ただ言いたいことは、自分達の未来は、彼らに委ねられているのだ。

そんなことを考えながら、政治家とは少し離れた場所で飲んでいる男は、政治を憂いながらも、少し羨ましく思っていた。

「…マスター。ご馳走」

男のそばに座っていた幾多は、席を立った。

「かしこまりました」

スウと値段を書いた紙が、来た。

「…」

幾多の隣にいた女は、無言で席を立った。

「こちらを」

会計が終わった幾多に、マスターは名刺を渡そうとしたが、やんわりと断った。

「幾多様」

店を出た瞬間、女が前を歩く幾多にきいた。

「帰られるのですか？」

その言葉に、幾多は軽く肩をすくめ、

「そうさ。だって、意味がないだろ？」

ゆつくりと振り返った。

「政治家ってのは、あんなものさ。そして、そんな政治家を選んだのは、国民……いや、普通の国民ではないか。無関心な国民を利用して、自らのエゴを通してきた支援者達だ。そんなやつらは、殺したいが……政治家を殺しても、社会は変わらないよ。また同じような政治家が、顔を変えて就任するだけさ」

少しため息をつくと、幾多は前を向いた。

「政治家を変えても仕方がない？」

驚く女に、幾多は話し出した。

「いろんな思想や宗教が、絡む政治の世界。彼らが組織で、投票する。それで、政治は決まる。国民の義務である税金も、社会そのものも！だけど、民衆はそれでもいいと言うように、選挙に行かない。そのことが、どれほどやつらにつけこまれているかを知らない」

幾多は、フツと笑い、

「多くの人間は、本当の自由とは何かを知らない。今が、どれ程恵まれた時代かということを含。政治に無関心でも、ある程度不自由なく生活できる」

雑居ビルから出ると、人々で溢れた町並みを見つめた。

「自由とは、知識や情報を得れることだ。その為には最低でも、学校で理解力を学ぶ必要がある。しかし、多くのガキがそれを放棄、放棄することが自由と誤っている。いや、違う！自ら無知になつてどうする？自ら、奴隷に戻つてどうする。逆に、受験という偏った知識を得るものは、社会の支配階層に入れるが…彼らも、真の意味で自由は知らない。この国自体が、自由を知らないのさ。なぜならば、民衆が自らの手で勝ち取ったことがないからさ。その癖、生まれながら当然の権利と誤っている」

幾多はため息をつくとき、人波を避けるように歩き出した。

「この国は、国としてのあり方も、国民としての権利も、人間としての自由も放棄している。近い内に滅んだとしても、仕方がない。選択しなかったんだからな」

「い、幾多様!？」

ずっと話を聞いていた女は、繁華街を越えても、幾多が足を止めないことに気付いた。

15分くらい歩くと、国道に出た。

さらに信号を渡ると、寺があった。

人気のない寂れた寺だと思っていたが、境内の端が駐車場になっていた。

「宗教も金儲けさ」

駐車場と反対側の門から中に入り、坂道を歩くと墓地が見えた。

「幾多様!？」

驚く女に、幾多は墓地を真っ直ぐ目指しながら言った。

「夜に墓参りをしてはいけないという決まりは、ないだろ？」

墓地に入ると、すぐに幾多は目を細めた。

目的の墓の前に、誰かがいたからだ。

「!？」

夜の静まり返った墓地は、人の足音さえ響く。墓の前にいた男は、幾多達の方を見た。

「あの男は！」

女は思わず、足を止めた。

しかし、幾多は足を止めずに、男のそばまで歩いていく。

「こんなところで会うなんて、奇遇だね。正流」

墓の前にいたのは、長谷川正流だった。

「それは、こっちの台詞だ。お前がどうしてここにいる」

長谷川の鋭い目に、幾多は肩をすくめ、

「君の妹さんには、僕の妹が世話になったからね。せめて、命日くらいは来ないとね」

長谷川に微笑んだ。

「フン！」

長谷川は鼻を鳴らすと、手に持っていた花束を墓の前に置き、そのまま幾多の横を通り過ぎた。

「捕まえないのかい？」

幾多の声に、長谷川は足を止めた。

「妹の墓参りに来たやつを捕まえる気はない。それに、銃を持つ相

手に丸腰では勝てない」

長谷川の言葉に、幾多は笑った。

「そんなことはないよ。正流が捕まえたのなら、捕まるよ。ただし、脱獄はするけどね」

「！」

「それに、もうすぐ玉切れなんだ。新しい銃を調達しなくちゃならないし」

幾多の言葉が冗談でないことを、長谷川は知っていた。

「お前は！どこまで、罪を犯すんだ！」

長谷川は振り向き、幾多を睨んだ。

「下らない人間がいるかぎり」

幾多は声をあらげることなく、普通のトーンで当然とばかりに言った。

「お、お前は！何人もの人を殺しているんだ！これ以上、殺人を犯して何をする！まさか、戦争支持者のように、1人を殺したら犯罪者。数万人を殺したら英雄になるとも言いたいのか！」

「英雄になんて、なりたくもない」

幾多は、顔をしかめ、

「俺はただ、美しい人間が健やかに生きていける世界を望むだけだ。君の妹のような人が、殺されない世界を望んでいる」

視線を長谷川の妹の墓に向けると、悲しげな表情に変わった。

「だから、人を殺すのか！簡単に、命を奪うのか！法に委ねて、裁きを受けるべきだ」

「その法を執行する者が、まともだったらな。まあ…それは論点がずれるな」

幾多は、真っ直ぐに長谷川の目を見つめ、

「俺は、命が平等とは思っていない。人の為、何かの為に生きる命と、他から搾取するやつの命が平等であるはずがない。人は同じではないんだ」

「そんなことはわかっている！」

長谷川は、苛立ちを露にした。

「正流」

幾多は、長谷川を指差し、

「お前は、カードで心の闇を暴き、罪を償うように持っていく。俺は、闇を持つ人間を排除する。償う時間など、数秒でいい。そして、数秒後に、死ぬことが本当の償いになる」

強い口調で言った。

元々、2人の主張は合わない。

それは、長谷川もわかっていた。

だから、長谷川は背を向けた。

「それでも、俺は…俺のやり方を貫く。今は、過去の犯罪者の心理を暴くことしかできないが…彼らがそこで、己の罪を認め、なぜ…罪を犯したのか考えることで、次の過ちは自ら回避できるはず」

長谷川は目を瞑り、

「次は、光が射す方を選ぶはずだ」

自分に言い聞かせるように言った後、再び目を開け、歩き出した。

「正流」

「何だ！」

幾多の声に、長谷川は苛立ちながら、足を止めた。

「お前と話しても…」

「どうして、こんな時間に墓参りなんだ？」

想像もしていなかった幾多の質問に一瞬、鳩が豆鉄砲を喰らったような顔になった長谷川は、一呼吸置いてから声をあげた。

「仕方がないだろ！仕事が長引いたんだ！それに、夜に墓参りをしてはいけないという決まりがあるのか！」

その言葉を聞いて、幾多はクスツと笑った。

「ないよ」

「くそが！」

長谷川は前を向くと、歩き出した。

「正流！」

また幾多が名を呼んだが、今度は振り返らなかった。

だけど、気にせずに、幾多は言葉を続けた。

「俺は、光を求めない。光を潰す闇を探し、そいつらを潰す。だから……」

最後の言葉を、幾多は言わなかった。

長谷川が墓地を出たからではなく、言いたくなかったからだ。

（だから……俺を殺せ。止めたければ、お前の手でな）

心の中で続けてから、幾多は自嘲気味に笑った。

（今のは？）

出入口ですれ違った女を、幾多はどこかで見たような気がした。

（確か…高校の）

思いだそうとしていると、携帯が鳴った。

慌てて境内から出ると、車の音に紛れながら、電話に出た。

「何ですって、インターネットの掲示板で政治家の殺人予告？」

長谷川は、眉を寄せた。

ここからそう遠く離れていないバーに、ある政治家がいるらしいが、そのことを呟いた者がいた。

彼は店内で、少し酔いが回り、本音を言い出した政治家の言葉をきき、殺意が沸き起こったらしい。

即座に、警察に情報は知らされていた。

「まったく何でもかんでも、呟くなよ」

もし彼が、精神的なことを言い出した時に、長谷川に診て貰う為に、スケジュールを開けておいてほしいとの電話であった。

「まあ、今の政治じゃ、そう言いたくなる気持ちもわかるが…」

長谷川は、自宅に帰ることを諦め、事務所で待機することにした。

「幾多様」

墓参りを終え、墓地から出てきた幾多に、女は頭を下げた。

「願わくは、彼女や俺の妹のような犠牲者を出したくはない。しかし、世界は広い」

幾多は、高台になっている墓地から繁華街を見つめ、

「仲間がいるかな？それとも、俺の目的に同調する者を呼び覚まし、自発的に行動を起こさすべきか」

考え込んでしまった自分に、にやりと笑った。

「やはり、人生は選択ばかりだな」

そう言うと、坂を下り出した。

「ただ：無知にはならないよ。やはり、知らせていこう。どれ程、美しくないかをね」

幾多の目に、迷いはない。

「かつて、ジャズの帝王と言われたマイルスデイビスは、知識を得ることは自由と言い、学べる場所があるのに学ばない仲間に、なぜだと問いかけた。なぜ、進んで奴隷に戻ると！その発言の背景には、アメリカでの黒人の歴史がある。しかし、日本人だって知るべきだ」

「…」

女は、幾多の横を歩く。

「真実を！教科書でさえ、歪んでいるのに、テレビの報道さえも！自由を破棄してきた為に、日本人はある種の無知という奴隷になっている。近隣諸国が主張することの真実。本当の歴史」

幾多は、境内を出た。

「知るべきだ。いや…選択権はまだ、個人にあるはずだ。どうになる前にな」

そして、空を見上げた。

町が明るい為に、星がほとんど見えなかった。

「美しい人々が、暮らせる国になるのだろうか」

幾多は、星に手を伸ばし、

「せめて、少しでも星が輝ける内に、そうなってほしいな。それまで、今が続けばいいがな」

フツと笑った。

「幾多様」

女の携帯が鳴った。どうやら、メールが来たようだ。

犯罪者である幾多は、携帯を持っていなかった。

メールの内容を確認すると、幾多はにやりと笑った。

「いこうか」

そして、再び繁華街に向かって歩き出した。

今の生活、知識を得れる自由。

それが、いつまで続くだろうか。

その保証はない。

なぜならば、君達が自ら勝ち取ったものではないからだ。

なくなったとしても、文句が言えようか。

君達は選択しなかったのだ。

未来を掴む為に、今こそ選ばよう。

しかし、選ばないことも自由だ。

その自由の先に、自由があるかは知らないが…。

終わり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8044h/>

二択

2011年8月22日13時15分発行